女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾六號

當府內無郵稅

一冊六錢

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 166. June 15th, 1889.

第百六十六號目錄

EDITORIALS:—Conservatism in Art.

LEADING ARTICLES:—Rules of Conduct for Female Students. by Dr. H. Kato.

CRITICAL NOTES:—Kōto-Jogakko.

MISCELLANEOUS:—"Middle Class Living and Morality." "Old Customs should not be Abandoned Thoughtlessly." "What is Beauty?" "Book that take interest and that do not." "Mr. Mori Rintaro Refuted."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

社説　繪畫に於ける國粹保存主義

論説　當今女學生の心得（加藤弘之）

批評　高等女學校を評す

雜錄　中等の生活と道德○暴りに舊習を棄る莫れ○名品は缺點多し○何をか美と云ふ○著譯書の遇不遇○森林太郎君に横鎗を呈す○柳の枝四條○茶話三

兒籃　乙女亞利斯（破月子）

史傳　芭蕉翁終焉記（晋其角）○虎御前眞蹟

小説　眞才子（麻溪居士）

寄書　女子職業學校篇引（しづの女）

開書　池袋大人へ呈す（賤の屋みやび）

時事　高等女學校○文部大臣及び高等女學校々長○矢田部良吉君○高等女學校々長の候補者○請ふ察ろ之を全廢せよ○余が身上○外八件

片々　高等女學校教諭○婦人の脚氣○其他十七件

外報　ユニヲン、シグナル○其他八件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Mrs. Yajima has not consented to resume her office as the President of "The Temperance Union," although she has been repeatedly asked to do so. It is to be hoped that the Association may have as worthy a successor.*

(2) *Mr. Tajima of Nagoya is the first person in the country, who married by a buddhist priest.*

(3) *A certain venerable buddhist priest in Kyoto. is known to keep a concubine beside his lawful consort.*

(4) *The number of patients in the Charity Hospital during the last year is 4691.*

BIRTHPLACES OF NOTED WOMEN. (II).

Mrs. Elizabeth Cady Stanton, Johnstown, N. Y., 1816.

Mrs. Katherine Margaret Sherwood, Bedford Springs, Pa., Sept. 14, 1841.

Lucy Stone (Blackwell), West Brookfield, Mass., 1818.

Mrs. Harriet Prescott Spofford, Calais, Me., April 3, 1835.

Harriet Beecher Stowe, Litchfield, Conn., June 14, 1811.

Madame De Stael,—Annie Louise Germaine Necker,—Paris, April 27, 1766.

Lydia Huntley Sigourney, Norwich, Conn., Sept. 1, 1791.

Edith M. Thomas, Chatham, and O., Aug. 12, 1854.

Celia Thaxter, Porstmouth, N. H., June 25, 1835.

Mrs. Ella Wheeler Wilcox, Windsor, Wis. ,1850.

Constance Fenimore Woolson, Claremont, N. H.,

Abba Gould Woolson, Windham, Me., April 30, 1835.

Adeline D. T. Whitney, Boston, Sept. 15, 1824.

Emma Hart Willard, Berlin, Conn., 1787.

Eliza Townsend, Boston, 1789.

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

釣らんとす。

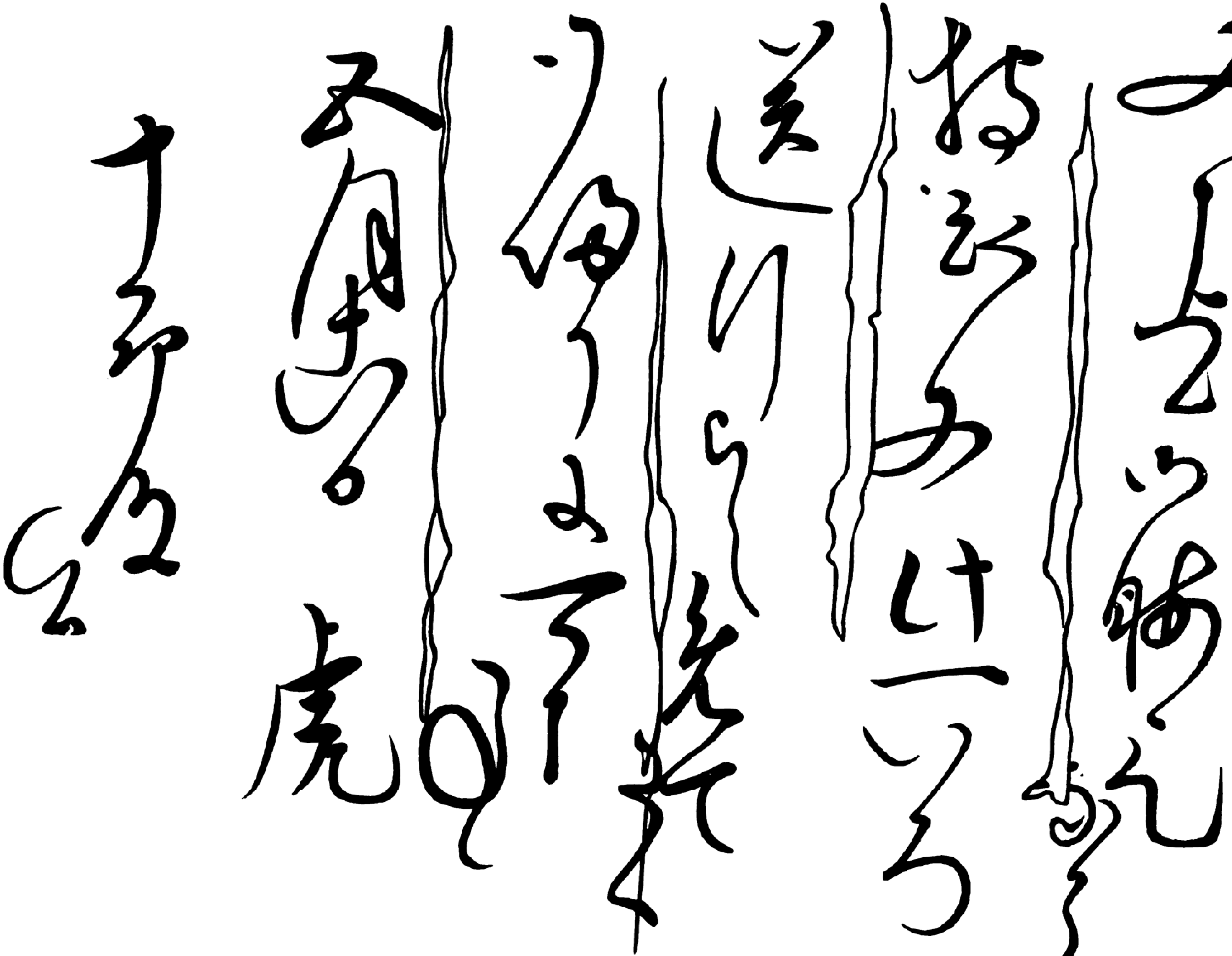
釣られたり。

最早切るの外なし。

舞踏會

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

虎御前真蹟



Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十六號
明治二十二年六月十五日發兌

社説

○繪畫に於ける國粹保存主義。

江月水に映じて閑ろし、憾むらくは漁夫一詩を賦せず。秋風梢を拂ふ、枯葉婆娑として落つ、悲しむらくは園丁心ろなく掃き去るなり。若し夫れ詩人畫家にして端なく此の風景に接しなば、彼等が無限の感線は乍ちにして大彈せられ、天來の美調突如として現はれ來らん、此に於てか秀句賦せられ、名畫作らる。　初めに於て漁夫園丁之を見れば、天地索然として味なし、後に於て詩人畫家之を見れば、一影一葉倘ほ是れ極切の趣味あり、　如此きは抑そも後と初めとの風景に醜美の差別ありしに因る乎。

思へらく天地は時に於て其美を増減する所ろなし、其の日月の爛として掛るところ、若くは浮雲之を覆ふて雷電の閃めく所ろ、櫻花春光に熟して万千の枝朶悉とく白き所ろ、若くは花落ち葉落ち枝枯れ秋月僅かに其の梢端に宿する所ろ、一望万里水天彷彿として接し波極めて平らかにして白帆の逍遙する所ろ、若くは怒濤天に溯のぼり檣折れ舵砕け大波の躍り呑んとする所ろ、英雄劍を提さげて江頭に立ち一鳥遙かに飛んで天空に入る所ろ、若くは敗軍の將途に迷ふて屈し農夫耕やし止みて鋤に背する所ろ、假令ひ其風景の雄壯偉大なるとき、若くは其の悲慘愁絶なるとき、若くは其の淡泊平々なるときと云へども、自然の美元は依然として存するなり、而して之を見る所ろの人の詩人あると武人なると俗人あると愚人あるとによりて、或は之に吟じ、或は之に泣き、或は之に嘯ふき或は之に歎す、悉とく之れ人にありて相逢す、天地にありて差別する所ろあるにあらざる也。

此故に、今の詩人が美に感ずるの情の、今の俗人が美に感ぜざるの情に遙かに優るあるが如く、若くは亦た今の解剖家博物家が天地を器械視するの情の、バーンス、ゴエテ等が自然に感通するの情に遙かに異れるが如く、今世のゲエテたりバーンスたるの詩人が、後代の更に美に感じ易き幾多の詩人に及ばざるに至らんと必せり。蓋し人はいよ／＼進ていよ／＼天地に感ず、其の學の益す深遠なるほど、其の識の益す卓高なるほど、其自然に通ずるの度更にいよ／＼切なり。　マコーレー云く哲學進みて詩神退くと、是未だ思ざるの論なり、哲學進歩の或る段階に至る比ほひは詩神暫らく退ざるとを得

し、然れども此の一と度び稍や退ぞく所ろのものは後來更らに大ひに進むの楷梯たり、開化は空想より出でゝ物形に入り更らに理想に入る、故に此の第二時代の進歩は彼の詩神の領地を破ると少なしとなさず、但だ夫れ一轉し更らに一進化する所ろありて即はち詩境廣ろし、此時に至れば哲學者は是れ物理學者、物理學者は是れ詩人、詩人は是れ英傑たるべし、此に於てか皆な唱歌し皆な讃美し皆な詩歌の仙となる、主云く終の日には男も女も老いたるも若きも皆な預言すべし。

若し終極の末代を理想するときは恐らくは如此くならん、然れども其の未だ此に至らざるに當りては、俗人は愚人よりも多く感じ、武人は俗人よりも多く感じ、詩人畫家は武人よりも多く感ずべし、而して此等詩人畫家の感ずる所ろ固より未だ其の完きにあらずたゞ其幾分に感じたるのみ、故に彼等は此幾分に據りて或は詩を作り或は畫を作り、此の製作によりて以て万人に天地の美の幾分を示す。此に於てか彼等は一方に於ては天地の註釋者となり、他方に於ては美術の敎師となる、自然の美元は之によりて漸やく俗世に悟られ、俗世は之によりて漸く自然の美元に接す、如此くして彌よ洩れ彌よ感じ、遂に天と地と自然と人と渾然として同化す、此に至れば万人皆な詩人となる、皆な畫家となる。

進化論を奉ずるの學者は種々に論辨す、云く人の万能は包圍（即はち自然の手）によりて作られたりと、又或は云く人の万能は種子の如し、たゞ包圍によりて開發せられたりと。抑そも此の二種の進化論中、その是非の孰れにあるかを確斷するは容易にあらず、然りと云へども兩論の共に同意する所ろのもの必らずや一あり、云く自然によりて進化したりと。左れば人の德性は最初包圍の爲に創成せられたりや否やに拘はらず、必らずや包圍によりて進化したるを見る、亦た人の智性は最初包圍の爲に創成せられたりや否やに拘はらず、必らずや包圍によりて進化したるを見る、德性智性すでに然り、然らば即はち彼の美性なるものも必らずや包圍によりて進化すべきものなり、或は自然によりて發はれ、或は自然によりて敎へらる、詩人は自然の美に吟じ、畫家は自然の美に寫し、一律は一律より美に、一幅は一幅より美に、彼等ますます美元に感じて、全身是れますます美元に圓滿し、遂に其の賦する所ろ乍まち金玉、手を觸るゝ所ろ乍まち春ならんとす、然りと云へども其の由來する所ろは即はち悉とく自然の手の敎導にあらざるとなし。

左れば模倣は之を哲學論に於ても、道德宗敎の論に於ても均しく不可なりとするが如く、美術に於ても亦た之を不可なりとなす。而して創造獨行の之を哲學論に於ても道德論宗敎論に於ても均しく可とするが如く、美術に於ても亦た之を可なりとなす。模倣は必らずや不可なり、創造は固より可なり、人は箇々靈魂を存す、若し個々相似て異らずんば人は其の多きを要せず、人間一靈を享けて生れ來るとき、彼は先づ一個の新事業を成就すべきの義務を負ひ來れり、故に彼は其の何の處ろにあるに關せず悉とく創造の責任を有す、創造なき所ろ精神なく、精神あき處ろ一個人あるなし。故に美術者は亦た必らずや創造の任を負ふべし、此を負ふて而して賦する所ろ斬新の吟となり秀抜の畵となる、詩人畵家の製作なるものは即はち是れ也。而して製作もとより可なり、摸倣必らず不可なり、彼の摸倣の製作にあらざるは屈從の獨立にあらざるが如しと云へども、然れども製作の孤立にあらざるは猶ほ獨立の單獨にあらざるが如し、製作は是れ自然に摸倣して自から調制するなり、自然の美の幾分を調のへて之を一天地に創造するなり、神は万有を作る廣漠として廣ろし、人は其の幾分を感悟して茲に小天地を作る狹まきと箱庭の如し。詩人多くは名山大川の間に産じ、畵家多くは幽谷奇谿の内に生ず、彼等は生れながらにして既に自然に感じぬ、彼等稍やく長ずれば則はち名跡美景を踏み、心を養ふといよ〳〵深し、自然は倘ほ常に彼等が敎師となる也、而して彼等卒然として吟じ卒然として揮ふ安んぞ知らん自然の大手は此時倘ほ彼等が心情を攪動し、美線激彈鬱勃として發したるとを、思ふに皆是れ自然の爲に蓄積したる所ろにあらざるはなし。故に美術家は固より製作を要す、製作は固より創造を要す、而して其の創造なるものは一種の獨立したる摸倣に過ぎざる也。

吾人此に至りて所謂る日本畵なるものを見る、其の神韻固より愛すべしと云へども其の形象甚はだ厭ふべし、彼は幼稚よして長老の言を吐くもの也、廢人にして英雄となるものあり、盲啞にして睥睨大言するもの也、其の氣節固より喜こぶべし、其の勇氣固より樂しむべし、然りと云へども倘ほ此れ片環たるを免れず、眞正の美術は之を正待するを許さず、況んや之を尊重するをや、況んや之を國粹として保存せんとするをや。

スペンセル云く小供をして先づ自由手に繪を畵かしめよ、即はち支那繪に似たるものを作らん、宜しく之をして彌よ畵か

しむべし、其手ます〳〵熟せん、於此乎規矩を敬へ、方圓の理を學ばしむ、遂に細密ある書あるを得んと。　蓋し人生れながらにして自然に似んとを欲す、特に其の自然の美を寫さんとするは實に天生の禀質なりと云ふべし、故に如何なる童子も皆幼にして書を見るとを好み、特に自から書かんとを欲す、而して其の初めに成る所ろのものは實に文人書に似たるもの也、之よりして若し書學上の正規則を學ばゞ彼は純然たる書家となるべし、若し彼れ此の正規則を學ばずして而して獨好獨書せば、彼の所云る粗雜ある文人書は其粗雜中に一法を現ずべし、之を無法中の有法となす。　彼の書するものを見よ、人苟くも筆を握るとを知らば、彼亦た安んぞ書せざらんや、書して久しく熟す、若し彼にして筆法を學びしものならんには王羲之にも似るべし、若し彼にして筆法を學ばずんば即はち自好流の書とならん、而して風流ある自好流の書は反つて純然たる楷書に優るの趣味なきにあらず。　思ふに日本書は即はち小供の獨好獨書して多年中に自得したるの書風を存するもの也、自好流の書家が八法に頓着せず釘折れ蚯蚓曲がる所ろ久しく熟して反つて龍躍り虎伏すの形象に似るに至りしもの也。　一見して趣味ありと云ふ、固より之れあり、然れども之を細視すれば即はち其の變生の趣味たるとを辨知せずんばあらず。

昔し辨慶は七ッ道具を持てり、而して牛若は短身にして小刀を帶きぬ、辨慶牛若と五條橋頭に闘ふ、辨慶遂に牛若に勝つ能はざりし、然らば則はち彼の七つ道具は一小刀に及ばざる乎。　否な七つ道具は固より一小刀に優れり、然れども之よりも多く牛若の武藝は辨慶の武藝に優りたりし、故に辨慶は遂に牛若に服したる也。此時に當り辨慶牛若に負けたり故に七つ道具は一小刀に及ばずと云はゞ如何ん、特に知らず牛若にして若し七つ道具を揮はゞ辨慶は更らに分碎せられたるとなからんとを。　嗚呼日本書果して氣力あるか、神韻に富めるか、高尚幽玄あるか、苟くも若し然るとありとするも、之れ未だ必らずしも其の山の佛掌薯の如く、川の素麵の如く、人の案山子の如くなるが故に由るにあらず、實に日本の書家の養ふ所ろ深く、鬱する所ろ切に、揮ふ所ろ強きに由るにあらずんばあらず。故に若し此の書壇の嗜しなみに加ふるに、日新の書則を知悉するを以てし、所云る牛若にして七つの道具を兼有するあらしめば如何ん、日本書は更に一大進すべし、國粹は更に一陽發すべし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

西洋の人切りに日本畫を愛す、於此乎日本の畫家揚々として自得し、歐米の客すでに如此し、萬國の博覽會すでに如此し、輸出する所ろすでに如此し、領事の報告する所ろすでに如此し、知るべし此れ西洋畫の漸やく廢れ、精神畫の漸く物形畫に代るの兆にして、東洋畫の將來に大ひに用ひらるべき確證なりと。於此乎政府は美術學校を開きて主として日本畫を敎へ、國粹論者は切りに慷慨し、古物保存の聲と古畫展覽の會と相應呼す、何んぞ其の思はざるの甚しきや。西洋人が日本畫を好むは、喩へば西洋料理の後に茶漬を好むが如く、亦た都人士が數里外の田舍に鷄犬の聲を愛するが如し、若し三日田舍に住して茶漬を饗せらるゝとあらば、彼等都門の天を望んで西洋料理を思ひ出さゝらんとするも能はず。察するに西洋畫當今の通弊は多く物形に流れて抽象に淡なるにあり、此は彼の十九世紀に物理論盛大を極めて靈界論の漠々悽冷となりしが如く、如此き當世の氣運は其の至り得べき所ろに流れ至れり、故に今や學論漸やく一轉し、二十世紀に於ては靈氣上の論辨將に盛んならんとするが如く、彼の多くの哲學論の再たびカントに反れと絕叫し來れるが如く、其の繪畫も亦た大ひに物形的に厭き果てたるなり。此に於てか日本畫の一賞翫を辱ふする抑そも故なきにあらず、恰かも是れ孔子釋迦の論の近時學者が一注意を惹き來るに均し。然りと云へども、若し吾人にして敢て大胆に預言するを得ば、西洋の哲學論は孔門佛敎を一顧して其儘正路に進行すべく、其の繪畫は東洋畫を一標品に買取りて將に正面に向ひ去らんとす。何處にか是れ正面ある、云く物理上の理、超理中の理、物形上の畫、物形中の畫、思ふに今の西洋畫に更らに神韻を加ふるものぞ即はち此れならん。蓋し西洋畫は或は寧ろ淡泊となるとあるべし然れども決して不規則とはならじ、或は寧ろ幽玄となるとあるべし、然れども決して亂雜とはならじ、或は寧ろ高尙優雅となるとあるべし、然れども決して仙人風とはならじ、要するに一も日本畫の正進路と伴なうとあらじ。

日本畫の不完全を擧ぐれば册を終るも足らず、然れども吾人は玆に只だ其二三を言ふべし。抑そも万物中の最美なるものは何ぞ、人間にあらずや、人間中最美なる處ろは何ぞ、其面にあらずや、而して日本畫は人物を畫くとに慣れず、特に尤も人の相貌を畫くとに欠けたり。天地の美は何の處ろに存す、エメルソンは之を個々全脉なりと云へり、彼の山は高く天に聳へ、水は遠く野外に流れ、白雲漠として萬里に渡

り、數莖の草露を含みて脛下に立つの處ろ、所云る山川天地遠近明暗相接し相應ずるの處にあらずや、而して日本畫は之を畫くと極めて拙なり、自然は奥深く傍近く空高く地低きくあるなり、日本畫は則はち之を一平面に寫す、恰かも尤も劣りたる寫眞の如し。　美術は必らずしも實用を主とせず、然れども美術の正當なる進歩は眞とに實用に適するの方向に進む、特に彼の國産論國權論の上よりして美術を說くものに至りては最深く此に注意せざる可らず、而して日本畫は物を精寫するヿを得ず、形に實似するヿを得ず、如此き繪畫によりて、建築を助け、企業を助け、交易を助くるヿを得ず。

然らば日本畫を改良せんか、固より可なり、然りと云へども若し日本畫を改良せば即はち今日の日本畫なるものは既に亡びたりと覺悟せざる可らず。　若し之を規矩によりて畫き、方圓角線の理によりて畫し、遠近大小の差に隨つて寫すとあらば、彼の日本畫(特に日本畫の尤も日本畫たる)文人畫に至りては、最早全く其の日本畫文人畫たる所ろを失ひ去るべし、此に於てか西洋人は最早愛顧せず、フエノロサ氏も最早辨護するを得ざるに至らん。

然らば日本畫は悉とく此儘に置くべきか、而して日本の畫家は悉とく此の儘の日本畫を學ぶべきか。云く或は可なり或は不可なり。日本畫を此儘にして存するは喩へば能を此儘にして存するが如くなるべし、故に一種の好みに應ずるの幸はひを得て畫家も亦た隨つて利達するを得べし。然れども總べての日本畫を悉とく此儘にせんと欲するは倘ほ改良演劇をも中止せんとするが如し、不利迷惑の甚しき如此きはあらず。故に日本畫は日本畫として存すべし、而して此の日本畫を學ぶものは亦た舊日本の畫家として存すべし。　但だ夫れ滔々たる日本畫の大勢に至りては將に西洋風に向ふべし、多々なる日本畫の生徒に至りては將に西洋風に學ぶべし、亦何んぞ怪しむヿを要せんや。　此時に當りて政府は何如なる處置を取り、美術獎勵家は何如なる方向を取るべきか、之れ亦更らに論ずるを要せざるヿ也。

國粹論者或は疑ふ、如此きは是れ國粹を滅するにあらずや。物産家或は恐る、如此きは是れ國産を減ずるにあらずや。然れども諸君決して心にな懸け玉ふ可らず、彼の物理を學びて東洋哲學の益す發揮し、基督教入りて日本人の道徳益す發揮するが如く、西洋の畫法は決して日本美粹の敵とならざるべし。亦た日本畫の物産たるを知らば、日本人が畫きたる西洋

畫何んぞ亦た國產たらざるとあらん、文人畫は支那より來りしなり、而して日本人の文人畫は支那人の文人畫に異なり、特に此の文人畫は數多の畫流と混淆して更らに多くの新流を創立せしめたり、日本人の文字は支那より來しなり、而して日本人の筆法は自づから支那人の筆法に異る、不幸にして未だ日本人の名筆を輸出するに至らずと云へども、然れども日本人の書の支那人の書に異るところは即はち以て日本人の西洋畫の西洋人の西洋畫に同じかるまじきとを預證すべし。嗚呼羊肉を食ひしのちは最早や之を羊肉と云ふとなかれ、西洋の文明を利用したるのちは最早や之を西洋と云ふと勿れ、吾人は西洋なるが故に西洋を師とするにあらず、只だ眞理なるが故に之を師とする也、只だ西洋に倣ふ所ろあり、倣つて而して獨立創造の覺悟を要するは万藝万學に於て皆な然り、何んぞ必らず美術に於てのみ悉とく西洋化し去らんや。全國數千里の鐵道は最早日本の鐵道なり、都市不夜城の電火は最早日本の電氣燈なり、帝國大學の哲學論は最早日本の哲學論なり、吾人基督教を信奉するものも依然として忠實なる日本人なり、美術のみ何ぞ必ずしも西洋化し去らんや。疑ふものよ決して狐疑逡巡躊躇する勿れ、疑ふものは風に躁さるゝ海の波の如し。

論説

○當今女學生の心得

加藤弘之

右は過日明治女學校の文學會に於て演述せられたるを社員が其大意を筆記したるものなり。

先刻から諸君の御演説だの、討論などを伺つて、餘程是迄の御勉強で上達成された事と感心しました。就ては別に學問上の事を御噺しするには及ぶまいと思ひますから、私は諸君の是からの、御心得にならうと思ふ事、即ち諸君の後來の一助にも成らうと思ふ事に就て、少し御話し致さうと思ひます。

諸君も御承知の通り此の日本國の開明と云ふ者は、丁度今より二十餘年前、則ち諸君の御生れになる少し前の頃で、御維新となる前位から外國との交通が始まつて來て、其の前の世界と今日の世界とはまるで世界が變はつて仕舞つた。そこで今日の生徒諸君には二十餘年前の事は餘程解からない事が有るだらうと思ひます、夫れは噺しに聞いて御出でにも成りませうから大抵解かりませうが、何うも話しに聞いたのと、自分が其世界に居つて目擊したのとは大變に違う。話に聞いた

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

事は二拾年前の事でも百年前でも千年前でも違はないが、見たる事、自分が親しく出會つた事なれば誠に能く解かる。夫れで何うも貴娘方の處では二十餘年前の有樣と云ふ者は、今日まるで變はつて居るから解からない事が多分にあらうと思ふ。そこで何うも二三十年前の事は今日に最う無くなつて居る事が多く有るから、只だ話しに聞いた計りでは、諸君の胸にまだ解らん事が澤山有らふと思う。中に就て女の一躰の事が就中大變に變はつて居る。女の以前の樣子と云ふものは敎への立て方が柔順にすると云ふ事が第一の本で有つた、夫れは支那の昔からの敎へで支那通りに成つた、夫れ故に先づ女には三從と云ふ事がある、則ち幼にして父に從ひ、嫁して夫に從ひ、老ては子に從ふと云ふ、此の三從と云ふものが女子一生の中一番大切の目的になつて居た、先刻も誰何かの御話しが有つて、女は妻となり母となる務め計りに生れたと云ふは未だ充分でないと云ふ樣な說が有つた通り、實に今日は其通りなれども昔の三從では生涯決して獨立の者には成られないのです、生るから死ぬ迄、人に從つて柔和成つて居なければならん、凡て卑屈を云樣な事では宜く無い、何でも吩附かる事を聽いて居らなければならんと云ふ樣なとだ。夫れだから女と男と云ふ者はまるで世界が違つて、先づ女は男の奴隷で、人に交際ふ事も出來ず、智慧を開くと云ふ事は固より出來ない、只柔和、柔順にして居らなければならんと云ふ、有樣で有つた。併し隨分女で學問した人も有る智慧の有つた人も有る、けれども夫は別段で普通人はさふでは無かつた。

夫であなた方は、話し計りで迚も實際は御存じが無いと思ふは、其時分の大名、大名と云へば即ち、今の華族だけれども彼んな者ではない、大名が外を通行く時は、大きな大名なれば二三百人の從士を連れて居る、寺詣りに往つても將軍の處に登城しても、小さな大名ですら二三十人の從士が附いて居る、さう云とは大抵今のあなた方には解かるまいと思ふ。今天子樣の御通りでも、誠に僅かの人で供奉するばかりである、宮樣杯に到りては馬車で僅かの護衛が附いて居るばかりだ。其時分の大きな大名は一町も二町も行列が續たとて、殆ど今の盛な葬式の樣な者であつた。そんな事はあなた方は話して聞いて居らつしやらふが、聞かない人もあらう、夫れが先づ二十年前の事で、今は話し計りに殘る樣になり、今日でも葬式を以て例に仕なければ解からんと云ふ樣に成つた。其時分に大名の奥樣抔が寺詣り若くハ實家に往く樣な事が稀にハ有た

が、外に身體を表はす事は出きない、表向の家來に顏を合はすと云ふ樣な事も出來ない、奧樣は家の中から駕籠に乘つて外に出る、實家に往くと駕籠の儘で實家の玄關の中迄這入つて仕舞つた、寺詣りも同じ事で、少しも外に身體を見はす事が出來ない。先づそう云ふ風に、女は成る可く隱れて居らなければならぬと云ふ譯であつた。其の位の有樣で有つたのに今日は華族の御孃樣でも學校に往くに從者も何にも連れない、或は人力車に乘つて往く位の者で、二三十年の間に其位に變はつて來たのです。そこで女子の凡ての教育も全く變つて仕舞つた、女學校で演說又は討論をすると云ふ樣な事は迚も昔の女の夢にも見ない事である、僅か此の二三十年の間だが、實に驚く可き變はり方であります。

男の方も、變はる事は變はつたが夫れ程でない、矢張り男子は從來とても學問も爲し相當の教育も受けた事だが、女は實に大變りだ。夫れ程に變はつたから私の考へるに、生徒諸君と母樣の間柄が誠に何うも一つ者になれない事と成つて來たらうと思ふ。同じ親子でも先づ母親樣は主もに云へば昔しの風で、只だ柔順が善い、理窟抔は知るに及ばない、女大學位を知つて居れば宜しいと思つて居る事で、先づ道理の解からん母親樣の方が多い。然るに其娘に至れば、大分道理が解かつて來た、夫れで何うしても母親樣より怜悧に成つて來て、母親樣が娘の眼には馬鹿に考へらるゝ樣に成つた、夫れ故善い工合に合はない。娘の方は夜る月を觀て月の中にある黑い處は大陽から光を受けぬ影の所ろで、白い處ろは高い處で光りの當る處だ抔と云ふ事は既に小學校で解つて居る、然るに母親樣の方は解からんでお月樣の中で兎が餅を搗て居ると云ふ樣な考への人が多い。故に母親に學校の噺しをしても面白くない、迚も話が合はない、又母親の方は兎の話しをしても馬鹿にされるから、娘と話をするは面白くない、又娘の方では母親樣の云ふ事は何うも馬鹿げて居る、母親樣の方では娘の云ふ事は理窟が多くて面白く無いと云ふ事で、其間が誠に六ケ敷い。世の中が斯う急に變はらなければ、さう云ふ事も無い筈だが、舞臺の早替りの樣に急に變つたから誠に調子が合はない。そこで私の考へるに、日本の昔しにも斯かる急變はない、又西洋でも有りはしない、凡て開化に進み往く事は、余程年月を經る事だから宜しいが、夫れが日本は突然に變はつて仕舞つた、道を歩行いて往つても、段々に歩けば道の變はつた樣子が解かる、然るに若しも茲に寢て居る間にさらは

れて、遠方に參つてから眼を覺ましたら何も解からないでまごつくであらう丁度其樣な有樣に成つて居る。そこで今日は先母親の方が智慧が無く娘の方が智慧が有る故、自然母親を侮ると云ふ樣な事に成り、兎角母親を蔑ろにすると云ふ樣なとが起る、夫れでは世の中が立ち往かないであります。其事に就いて私が心配するは、さう云ふ風になると一家の事も能く治まらない、親の方からも、娘の云ふ事が六ケ敷いので面白く無いと云ふ樣では、家族の樂みと云ふ者は充分でない。友達の間でも、話が合うと云ふ事は誠に面白い者だが、其話が親子で合はない日には些つとも面白くない、斯云ふても解かるまい、解かるまいから話さないで置かふと云ふ樣では面白くない、夫れでは家内の樂みも充分でなし、自然に又娘の方から親を愚弄すると云ふ樣な心が出ないとも言ない、輕蔑すると云ふ樣な心も亦出ないとは云へない。併し實の親子の間なれば未だ宜いが、是れから他家に嫁して往くと、姑との間が餘程六ケ敷いと思ふ。眞の親子なれば說は合はないでも別に喧嘩するとも無いが、姑とあれば又一段治まりが悪るい、娵は譯が解かつて、姑は譯が解からん、さうなると何うも姑と嫁の中が六ケ敷なる、娵の方は自分が道理を知て居るから姑を馬鹿と云ふ樣な取扱をする、そこで姑は尚ほ怒ると云ふ樣に成つて、益々治まりが着くまいと思ふ。大抵あなた方が是れより嫁すと云ふは當然の事で、母親の間より寧ろ姑に事ゆる者で有るから餘程心せねばならぬとと思ひます。

そこで私の思ふには、譯の解かつた方から其の事を心得て往かなければ成らない、其を心得て往くが第一道德上に大切の事だ。智慧が十分有つた所が、智慧を誇つて、親に事へ姑に仕ゆるに麁末に成ると云ふのは道德に背く、夫は悪るいとに相違ない。所が道德と云ふ事になれば又あなた方と姑方の道德とは違う、昔しの道德は何でも柔順でなければ成らないと云ふのだが、今日の道德主義は、奴隸の樣にさう柔順ばかりでは仕方がないと云ので、昔の道德の主義とは主義が替つて來て居るから更に餘程六ケ敷い。姑と云へど壓制するとは出きぬと云ふ腹を娵が持て居るを、理づめに交際をせんとしては到底治まりが付かん。畢竟道德主義が違つて居るのだから先づ智慧のある利口の方から調和をして、紛雜の起らない樣にするより外に仕方がない。其の上に娘、娵と云へる地位が下に在るのみならず、昔しの母親や姑は充分に解からないにもせよ、諸君よりはまだ是れ迄の經驗に富んで居る、兒を養

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

おひ家を治むるとに就ても、經驗は充分あるに相違ない、夫れが若い人には無ひ、縱令今日の開けた教育を受けても永い間だ經驗した事は少も無い、其の經驗は、教育が無くても智慧が無くても年を取つた人に在るのだ。今日自分の方に智ありとしても、其の智なき人の爲めに育てられて大きく成つたので、幾ら威張て見ても、其教育や智慧の少なかつた母親が無ければ、今日迄育てられて大きく成るとは出來なかつたに相違ない。そうスレバ智慧はあり譯は解かつて居ても、經驗に於て叶はない。猶ほ其の上に、今迄保護を受けたから是れ迄に成たと云ふ處の、何うも大なる恩がある。然する時は自分の方の主義で、彼れを押付けて仕舞うとは出來ない。矢張昔し流の主義は今の主義に合はず、又間違つた者だと思ふても、是れを顯はして逆らう抔の事は決してあるべき筈の者では無い。縱令心に適はんでも、成るべくそれに從がはなければ成らない、新らしき主義は宜しい事は宜しいが、其主義を以て昔しの古るい主義を擊ち潰す樣な考があなた方に在つてはよくない。是れは已むを得ぬから、當分の所ろ昔しの主義に從つて居らなければ成らない、諸君が何事にも關係せず唯自分が敎へられた新主義でやり通すと云樣なとでは、自家のファミリイでも嫁した良人の家でも、迚も治まるべき筈はない。學者が出來れば出來る程、教育が開ければ開ける程、社會が六ケ敷いと云ふ樣なとに成つては困ります。

併し諸君方が是より年を御取りに成つて、最う母親になり姑に成つた時は樂になる、最も今度の兒女は教育の主義も何も彼も一つに成つて仕舞ふが今あなた方の地位が一番六ケ敷い所と思ふ。學校で智慧が增し譯けが解かつて、中々今日の演說や討論抔を聽て居ると感心致すとが澤山あります、そう云ふ樣な感心する主義で親や姑に對すると大變間違つたとが出來樣と思ふ。其れはお考へのある人もあらうがどうしても諸君の一代は二つの主義、即ち新舊兩主義の闘つて居る所だから漸しき主義は少しく枉げて從はなければならない、トテモ親や姑を說き伏せるとは出來ません、親や姑は固と十分教育を受けたる人ではないから道理は分からんでも經驗はある其經驗で育てられた身分であるから、先づ夫れに從つて往くと云ふ樣に仕なければ、決して一家の治まるものでない、ファミリーが治まらなければ天下が治まらないのだから私は殊に是を大切に致すのです。

併し夫れは當分のとで先程も申す通り諸君の子の代に成れば

二

最う宜しいが只今日の處は眞に余義ない所だから、此事を能くお考へに爲つて、母親と姑に對しては忍で古るい主義に從はんければならない、智識は我にあるが、彼には經驗と云ふものと地位と云ふものがある、其上我は又德義を守ると云ふことが大切であるから其邊に就て深く御熟考あらんことを望みます、今日は只夫れ丈けのことを鳥渡御話し申す丈けです。

批評

○高等女學校を評す

近頃ろ諸新聞紙に於て種々の悪風評を見る、其の最とも甚しきは改進新聞の小說「濁世」にして、次は「日本」、日々新聞、及び讀賣新聞等に揭げたる數多の雜報なりとす、而して苟くも之を一讀したるものは、其筆鋒の悉とく高等女學校に向へることを諒知するは極めて容易ならん。

吾人は不幸にして未だ必らずしも高等女學校の教育法に賛成する能はず、故に若し其の取締方の行はるゝ所ろ、其感化の行渡る所ろに就て愚見を開ふものあらば、吾人は慨然として之に不同意を表せざるを得ず。然りと云へども今の諸新聞紙上に風評するが如き、斯る非常なる出來事の此校にあらんとは決して斷信する能はず、故に吾人は前々號に於て少しく之を辨じ、反つて此校に代りて大ひに怒りたるものなり、思ふに校長矢田部良吉君は不羈磊落の人なり、教頭野勢榮君は異常無頓着を以て名ありたる人なり、左れば兩君が行爲往々にして世間尋常の通感に逆らひ、之を以て怨を買ひ、之を以て反對論を釀生したる少なしとせず。故に今回の悪風評の如き、其多分は兩君に對するの誤解より發生せずんばあらず、吾人竊かに兩君の爲めに惜しみ、亦た世上文筆の君子に向つて少さか辨する所ろなくんばあらず。

然りと云へども吾人は此際甚はだ不本意なる評論を爲さゞる可らざるの時機に會せり、即はち、「國の基」第三號に載せたる野勢榮君の「教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとする者は何如なる男子に嫁すべきか」の一篇の如きは、何如にすとも吾人をして一論せしめざるを得ず。野勢君は當今教育ある女子の當に嫁すべき、嫁す可らざるの人物を擧げ、一々之を評して云く、

政治家の業學は虛名のみ而して此虛名を買ふ爲に非常の費益を消するもの也政治の思想は衆人同一の者にあらざれば政治家は常に前后左右に反對者又は仇敵の埋伏するあり其甚しきに至りては暗殺となり要擊となり貴き一命をも犧牲に供するもあり、左れば政治家の妻たるものは常に薄氷を履むが如き有樣にて其心配は實に想ひ遣らるべし。

商法家は機に臨み、變に應し一たび手に唾して千金を攫む機會もありて、甚だ面白き活潑なる職業なれども、一たび失敗すれば、身代限も尚ほ及はさる窮貧に陥り、甚しきは落膽の爲に首を縊ることなきにあらず。其の盛衰苦樂の變化甚しきものなれば、是れ又安心の職業と云ふべからず。

農業は之れに反して、至りて安心なる職業にして、非常の旱魃、水損あるにあらざれば、每年豫定の收穫ありて、質素と節儉を主とすれは、ゆるく富を增す職業なり。然れども精神を多く勞せざる爲に、身躰は骨折れ、餘り學問を要せざる業なれば、知識の進步少なく、名譽を求め、人に知らるゝ機會少なくして、なんとなく田舍臭き氣味あり。教育の十分ある優良なる女子は、農夫を良人とすることを好まざるべし。

工業は至極面白き業なれども、鑛山を採掘し、鐵道を敷設し、橋梁を架し、堤防を築き、製造に從事するもいづれも皆危險の職業にして、時としては蒸汽機關の破裂することもあり。鑛山の崩潰することもあり。折々は滊車も轉覆すべく、滊船も難破すべし。又有毒の瓦斯を呼吸せねばならぬこともあり。雨に濕れ、風に梳る困苦あり。夫れに工業は凡て戶外の業なれば、工業家の妻は常に一人獨居して淋しく、良人の歸宅を待ちわぶる苦勞あり。意外の災難に出逢ふ心配あり。

醫者は仁術にして、能く人を救ひ、又藥九層倍の儲けもあり。富を得る捷徑さ

も謂ふべき業なれども、夜中戸を叩きて急病と呼べば、寒風、雨雪をも厭はず、暖たき寢床を去りて、車を飛ばさねばならぬことあり。又傳染病流行の時には、毎日戰々兢々として恰も彈丸雨注の下に居るが如き思ひをなし、加之時として其人の衣服に持ち來りたるバクテリアが、其の衣服に附着する等の心配なきにあらず。誠にいやな事なり。

海陸軍人は位記高く、勲章を輝かし、金服を裝ひ、金劍を提げ、俗人の眼より見れば、光榮無限に見ゆれども、俸給其の割りに少なく、概ね貧困に頻らざるを以て苦とするが如し。而していざ戰爭と云ふときには、一發の砲煙に生命を投ずる憂あり。又太平無事の時にても、演習、出張、轉營其の他軍人は絶えず出勝ちにて、殊に海軍に從事する者の如きは、遠航に三三年を費すことありて、細君は孤衾を守る日多く、誠に厭ふべき境界に居らればならぬものなり。

噫吾人は如此き説を聞く、實に之を女子教育の爲にのみ概くにあらず實に日本將來の爲に歎ぜざるを得ず。吾人常に思へらく、苟くも女子教育に熱心ならんとするものは、其心先づ人類を博愛し、極めて平民的の思想を懷抱し、遙かに後世を思ふの大哲見を有せざる可らず、然れども今に於ては此外先づ現今の日本人を思ひ、亦將來の日本人を思ひ、之が正大なる進歩を爲さんとを欲するの上よりして着眼せざる可からずと。嗚呼今後、社會に横行する平家の若殿原を退け、チャーレス朝の青士ひを除き、日本人をして東洋の一島に鬱勃する蒼雅流たらしめんと欲するには、彼の女性が熱腸に義を慕ひ道を守り國家の爲に敢死するとが雄壯なりとするの氣節を養ふに若くなし、今の日本の女子教育家にして苟くも茲に着眼するなくんば、吾人は其人に乞ふて寧ろ佛都パリに行て女子を教育せよと請はざる可らず。

然るに高等女學校教頭野村榮君は云く、政治家は反對者又は仇敵の爲に暗殺せらるゝの恐あり、商法家は盛衰枯榮の變化甚しきものなり、農業は名譽を求め人に知らるゝの機なし、工業は怪我をするとあり、醫者は夜中寢床を立出で又はコレラ病に接するとあり、海陸軍人はいざ戰爭と云へるときに生命を捨てざる可からず、故に如此き危險なる人々の妻たるを勿れ、寧ろ安心なる、名譽ある、たとひ免職になりてもツブシのきく文學士理學士に嫁せよと云ふに至りては、今の日本教育社會に如此き非常なる奇男子あるを痛歎せしめずんばあらず。嗚呼左右前後に反對黨の群がり來るとき、毅然として義を守り、能く人民の爲に善政を施くは政治家の責任にあらずや、如此にして時に暗殺せらるゝも亦た不幸なき也、而して之を内に助け「天下悉く逆らひ立つときも只だ卿あり」として安んぜしむるは豈に政治家夫人たる者の徳にあらずや、其他商法家が國運を發起し、農業家が國産を増殖し、工業家が天與の幸福を作成し、醫師が自然の病害を防止する如きは、一に是れ職業中の尤も崇貴尤も高大なるものにあらざるはなし、但だ夫れ崇貴高大なり故に危險多からずんばあらず、此時に當りて能く此の危險に忍び、剛膽果行敢て壯志失たらしむるものは皆な夫人の刺擊あるに由る也。故に今の女子教育家は平素深く此の一理を確認し、時に女生に英雄の偉蹟を談じ、若くは冒險勇敢の男らしき事を述べ、屢々更に彼等が剛毅心を養成して他日大ひに世に働くに至らしめざる可らず、女子教育が國家經濟に大關係あるの尤も至大なる所ろは即ち是れ也、而して野村君の言ふ所ろ如此し、君何んぞ思はざるの太甚しきや。

然れども吾人は一個人たる野村君の言論を左程に重視するものにあらず、但だ君が高等女學校教頭たるの故によりて如此き卑劣論を寛假するを得ざる也。故森文部大臣深く女子教育に熱心し、平生厚く高等女學校の爲に計る、吾人嘗て之を前高等女學校幹事矢作吉君に聞く、大臣が此校に於けるは尤も優良なる妻母を養成するにありと、其後矢田部君校長となり、大臣も亦た人を易ゆと云へども、爾來高等女學校の目的は其文面に於ても變らざるが如く、其精神に於ても決して變る所ろあらざるべし、即はち高等女學校は優良にして有用なる婦女特に妻母たるべきものを養成するの學校たらん。而して其教頭野村君は實に如此き教育法を以て女生を教育せんとなす、吾人は嚴肅に今の文部大臣に問ふ、抑も足下が優良有用なる婦人と認たむる所ろのもの果して亦如此きか。

吾人は紛々たる風評に就て論ずるものにあらず、又只だ自己の好惡に就て論ずるものにあらず、窃かに信ず國家大事の上よりして觀察するに吾人は決して如此き教育法の政府の手より出づ可らざるを切論すと、高等女學校は年々一萬餘圓の脂血を費す、高等女學校は宣言して女學校の模範を造ると云ふ、高等女學校は熱望して最良の日本母妻を發はんと欲す、而して其の教頭の理想する所ろ如此し。曩に高等女學校の規程を擴張するや、吾人は矢田部君野村君の演説を聞きて其の熱心なるに伏し、女學雜誌第百三十號三十一號に於て深く之を祝したり、嗚呼昔し尤も切に之を祝したるものは今亦尤も深く之を弔せざるを得ず、抑も一の高等女學校、一の野村榮君は、吾人が眼に於て何んかあらん、但だ吾人は此等が影響の及ぶ至大なるを見ては切言せざる可らず。 敢て文部省の注意を乞ふ、敢て文部大臣の注意を乞ふ、如此き教育法は民の脂血を費して養成すべきものにあらざる也。

雜録

○中等の生活と道德

三苫居士

「我をして貧からしめず又富しめず惟なくてならぬ糧をあたへ給へそは我あきて神を知らずといひヱホバ(神の聖名)は誰なりやといはんことを恐れまた貧くして竊盜をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり」とはソロモンの箴言中に載せられたるヤケの子アグルが神に懇求せし所なり抑も道德の重に中流の生活中に在て存するものは貧富の兩端自から人をして不德の道に陷らしむる一種の傾向あるが故なりアグルが我をして貧からしめずと祈れるは人貧究に迫る時は卑劣の精神自から生じ遂に其極盜せざれば止まざるに至るものあるを知ればなりまた其我をして富ましめずと祈れるは人富貴なるときは自から心驕傲に陷り仰では神明をなみし俯ては同胞をかろんずるの勢誠に制しがたきものあるを知ばなり正に是人身の健康安全は彼の鐵を鎔かす赤道直下にあらず又指を墮す兩極氷洋にも非ずして寒暑中庸を得たる温暖の國地に在りて保全せらるゝものゝごとし。然く貧賤にして道德を保つと誠に難しと雖ども抑貧賤の地位また必ずしも道德の果實絕へて結び難しと斷言すべからざるあり反てこの保ち難きの場合に於て之を全ふするもの寧ろ之を堅貞の道德と云ふべくして如斯人は誠に君子と稱すべきなり又富貴利達して驕傲放恣ならざること人情の至つて難んずる所なりと雖どもまた必ずしも道德の花瓣絕へて王侯の冠毬を飾ることなしと斷言すべきものにあらず時に或は富貴愈々盛んにして道念愈々熱きを致すものあり此の如きは寧ろ練達せる道德と名付くべくして是れまた君子の人たるなり。然れども人誰か已れを以て千万人に超絕せりとせんや衆人の惑ふ所ろ我れ亦惑はずと云ふべからず衆人の墮るゝ所ろ我れ亦墮れずと云ふべからずアグルは人生の實驗に徵して貧困の人をして甚だ卑劣ならしむるを知れり故に我をして貧からしめずと云ひ富貴のまた人をして甚だ驕慢ならしむるを知れり故に我をして富ましめずと云へり。吾人をして時と力とを良用し以て怠ること勿らしめば富貴ならずと雖ども食ふに魚菜あり纒ふに衣服あらん既に必用の衣食あらんか吾人の修養は寧ろ精神上に向て進むべき也吾人の爵位は天與の爵位に於て求むべき也世に中等生活の實に幸福なる生活感謝すべき生活貴重すべき生活なるを知らざるものあり記して以て之を戒む。

○濫りに舊習を棄る莫れ　しのぶ

女生二人演說して、一人は先づ養老の瀧の古事を引きて孝行の德を述べ、今ま一人は鳩に三枝の禮ある由を申して女禮の大切なることを論じぬ。余は聞き了り感に切まり、補ひて話しけるやうは、汝等の言甚はだ宜ろし、之に付きて考ふべきは、濫りに舊習を棄てまじきと云へるの理りあり。先づ美濃山中の瀧の水變じて酒となる、是天、孝子の志ざしに感じてなりとあつて、天皇行幸ましまし之を養老の瀧と名づけらると、古へより語り傳へて之を美談なりとなせど、若し之を今の理學士に聞かせて冷淡に考ふるときは、思ふに當時其水上に何等かの變動ありて、瀧の水所云る炭酸水の如きを流すに至りしものか、若くは猿猴の類が蓄へたる葡萄液の流れて之に混入したるか、又は楓樹糖木の類ひの液之に浸漬して水を甘くしたるか、大凡そ此如き理由のありて瀧水少さか酒味を帯ぶるに至りしならん、故に此時に當りて若し水を汲まば、たとひ盜跖が之を掬するとも其水甘かるべく豪右衛門が之を飲むとも亦た酒にてありけめ。次に彼の反哺の孝三枝の禮など云へることに付ては古人も少さか說を述たり、一二の隨筆に、烏は至つて不孝の鳥にて、老ひたる親が口に食はへたる食物を奪ひ取るなり、此樣を見て人は親に反哺すと思へり、又鳩は至つて不親切の鳥にて、久しく養はれたる親同胞の仲間と喧嘩を爲し、一樹に宿するも枝を隔てゝ止まる、此の仲の惡しき樣を見て人は三枝の禮ありと云ふと。思ふに此の說宜ろし、何か如此き理由のあることにて決して反哺三枝の禮などのあるにはあらざるべし。斯く悟りて考ふるときは、養老の古事も鳩の感話も極めて馬鹿〳〵しくなるべし、故に之を馬鹿〳〵しとして、一笑に附するは即はち文明の餘德にして、之と共に吾等は一段の進步を爲しぬ、寧ろ喜こぶべきことにてあらん。然るに此に一つの尤も大切なる注意あり、即はち如此き古事感話の馬鹿〳〵しくなりたると共に、抑そも孝と云ひ禮と云ものゝ馬鹿〳〵しくありしや否やと云ふこと也。見よ、瀧の水變はりしのちに初めて孝行の美あることを悟りしにあらず、亦た三枝の禮を見て初めて禮儀の宜しきことを悟りしにもあらじ、必竟孝と云ひ禮と云へるものを尊とむの道德ありて而してのち只だ此の二事によりて其道德を寫したることならん、故に此の寫したる者たとひ破るゝとも道德は依然として存す、喩へば寫眞を破り去るとも其人恙がなく生き存らへ、水に映る月影を碎くとも

月は尚ほ中天にかゝやくが如し。

故に二十四孝の談しを聞きても、今日の人が夏夜蚊にかまれ冬の朝氷に眠るなどは不所存の至りと思はる、寧ろ勉強して働らき、早く蚊張を買ふか若くは鯉一尾を求るに若かず、若し衛生を損して躰を傷めなば則ち万事廢す、此時に至ればは寧ろ不孝の第一となるべし。然し斯る行ひに過ちありとも、蓋は只だ行ひの賢愚、時の古今によりて相違あるのみ、親を思ふと云ふ一心に至りては万古決して變るゝとなし、今日養老の瀧の水は乾くとも、鳩は相群りて禮を欠くに至るとも、仁義孝行禮讓の德は決して廢る可らず。

眞理と、眞理の影とは如此く關係す、故に舊習を棄るに當りては汝等ことに能く注意せらるべし、舊習すでに舊るくならば棄るもよし、然し舊習の中に存したる精神は決して棄つ可きにあらず、故に此の精神に新らしき着物を着せ、改めて之を確かと所有する迄は未だ濫りに舊習を棄つるとある可らず。一例を擧れば衣服の如し、衣服すでに弊悪になれば之を棄つるもよし、然し之を棄つると共に抑そも衣服を着ると云ふの主旨をも共に棄てゝは相成るまじ、故に舊衣を棄つると共に直ちに新衣を着し、先づ一身の醜くさを隠くすの覺悟を爲さゞる可からず、然るに元の衣服は醜くしと云て乍ち之を放擲し去りつゝ、別に之に代るべき新衣裳を着ず、則ち裸躰のまゝにて、横行せば見惡くきと一層なるべし。

汝等よく此道理を辨じ、昔しの女禮が弊多かれば棄つるも善けれど之と同時に立派なる新女禮なかる可からず、昔の孝行を馬鹿〳〵しと悟らば去らば同時に新文明の孝行を篤と實行すべし、一方には温和しき昔し風を棄てゝ、他方には優美なる新女風を取らず、恰かも舊衣裳を脫いで裸躰となり、學問を學ぶの結果として女德を欠くに至つては抑も之を何とか云はんや。

汝等が立居振舞、汝等が世人との交際、汝等が權利談に於ける心得等、一に濫りに舊習を破らず、破れば必らず新らしき美習を代用するの決心あると甚はだ大切也。

○名品は缺點多し　　　輕　快　子

篠崎小竹山陽詩鈔を序し又山陽遺稿を序したり。詩鈔序は極めて瑕瑾を以て充ちたれども無瑕の遺稿序より遥かに勝れり。凡そ秀作逸品と曰はるゝ文字は極めて缺點に富み缺點なき文章は平凡のものなり。カーラッシオ曾てチイントレットを評して曰く「余はチヽアンと同格なるチントレットを見れども時にはチントレットより劣れるチントレットを見る事あり」

と。トラブレットも又曰く「佳處大佳處愈々多ければ缺點大缺點の益々多き事怪しむに足らず今若し瑕瑾多き文ありとせば是を熟讀せずして遽に其是非を判定すべからずと雖も一小瑕瑾だになき文ありと云へば斯は慥かに平凡のものなり」と。西鶴と馬琴は最も缺點多き名文章を作りし人なり、セキスピヤとドライデンは英國の最大詩人なり又最拙詩人なりとある批評家は曰ひたりとぞ。

〇何をか美と云ふ　ジヨン、ラスキン述　かすみ譯

大凡そ何等の智力をも用うることなく、たゞ之を見て卒然愉快を感ずるとき、此の物を稱して美なるものとなす。然れども吾人は何故に或る形ち或る色を好みて他の形ち他の色を好まざるやと問ふものあらば、此は吾人が何故に砂糖を好みて蚯蚓を好まざるやと問ふに均しく、殆んど之に答ふるの價ひなきものなり。若し強いて其解釋を求むるときは此れ人間の天性なり天質なりと云ふの外なし、而して其天性天質あるもの、果して何者なるやを考ふるときは、實に此れ吾人を創造したる天帝の意思如此くありしと云ふの外論解あるまじ。故に吾人天帝の賦性を考察し、退ぞひて密かに吾人々類の性質を思ふに、抑も人心の健全あるとき若くは教育せられたるときは彼天帝の性を現示する所ろの物を見るとき則はち愉快の感なくんばあらず、但し吾人は此物の能く天帝の性を現示するが故に若かく感ずるにあらず、亦た其能く天帝の性を現示するとを悟るが故に若かく感ずるにもあらず、實に是れ必然自然の關係によりて如此く感ずるに過ぎず、喩へば吾人が薔薇を嗅で自づから美香を感ずるが如し。

人類自然の性質は素と如此くなるなり、而して教育もしくは偶然の事情之を感化して種々に變ぜしむ、即はち此本然の美を感ずるの性質或は養はれ、或は抑へられ、或は進められ、或は退ぞけられ、或は正路の案内によりて尤も鋭敏なる極めて誤りあきの感味に導かるゝとあり、或は怠りによりて百種の誤りと失とに導かるゝとあるなり。此時に當り、能く彼の素性の好む所ろ嫌ふ所ろの自然法に順ひ、且つ常に之に順がひて彼の自然法を益々有力ならしめ、遂に天帝が素と愉快を感ぜしめんとしたる所ろの物を見ては常に愉快を感じ、以て天地萬物より成るべく多くの快味を感ずるに至るもの、之を呼んで趣味ある人と云ふ。

〇著譯書の遇不遇　ふ、ち、

最近の國民之友時事欄内に「流行せりユーゴーの翻譯」とあ

り。ユーゴーの翻譯日本に現はれしは三日奇變英雄之肝膽を以て初とす。其當時は格別に人の注意を引かざりしに森田氏隨見錄を譯し依田氏の賛評を得、次で探偵ユーベルを譯し長谷川氏の嗜好書目の中に撰抜せられ。ユーゴーの名遂に文壇を發動せり。今は十年の昔とありしが織田氏が花柳春話出るやリットンの名は在來文學者の耳朶を驚かし關氏の春鶯囀出でゝヂスレリーの趣向は幾多の政治小説を産出したり。此三氏は歐洲屈指の文學者たれば文字の雄偉或は婉麗なるは云ふまでもあけれど其地位境遇は更に一段の光榮を加へたるあり、よし是れあらずとするも歐洲の文學豈是等三氏に止まらんや。我國語に譯されしものにもセキスピヤありヂッケンスありカルデロンありシルレルありツルゲーチフありアーピング(米人なるが)あり、然るに一も唱道する人なきは抑も唱道すべきの妙味なきか將た妙味あるも是を咀嚼するの人なきか。數年前に自由を主張せし急激論者縦横せし時デユマのTwenty Years After(譯名忘れたり)を譯せし者ありしに四方賞讃して措かざりし、其後關氏全じデユマのモントクリスト(西洋復讐奇譚)を譯されしが顧みるもの極めて少なかりき。報知新聞の新嘉坡通信の欄を設け森田氏の初めて健筆を揮はるゝやアラビヤ物語の如き奇異談若くはベルチの著の如き變幻を以て西洋小説の本色と考へ月世界一周海底紀行等の理學小説を愛好するもの頗る多きを致したり。黒岩氏の今日新聞紙上にガボリアー及ボアスゴベイの著を譯載せらるゝや探偵小説こそ最も進歩したる文學と心得るものあるに到れり。過不過は常と云ひながら我文界の人々即ち坪内氏はセキスピヤを長谷川氏はツルゲーチフを福地氏はシルレルを森氏はカルデロンを譯されしに是を嗜好し且つ賞讃する人少なきは歎ずべき哉。書肆某の話に發兌以來購客の絶へぬは雪中梅ありと、又赤本屋某の話に新聞小説にて都鄙の評判最も喧かりしは繪入新聞の淺尾岩切眞實競なりしと。曾て英國某圖書館の統計を見るに最多人の愛讀するはアラビヤン物語なりし又全國某書肆の報告に依れば失樂園詩は一年の買購者僅かに十指に滿たざりしといふ。いづくも變わらぬ事と見へたり。

○森林太郎君に横鎗を呈す

丸山通一

國民友第五十號を讀み森君の美術論を拜讀せしに筆勢凜々たる好文字なれども晦澁模糊一方ならず漢文と獨逸文の直譯とも稱すべく語氣の高慢なるには殆んど吐嘔を催ふせり其論旨を吟にて解せば美人は不道德にても宜しと云ふに近し暗かに恐る美を口に藉て道德を輕ずる者の相率て起らんことを之れ森君に横鎗を呈する所以なり。

美　哀れや森君は美の何たるを知らず曰く「流一物の想たる想の物たる是を美と謂ふ千古に亘て變更す可らざる美の定義は道徳の是に存在す」と嗚呼何ぞ陋だ唐人の寝言に似たるや之なしも千古に亘て變更す可らざる定義とは左ても左ても。

又た曰く「プラトン、プリース、シルス、ヘルバルトの如に善と美とを混合しチヤア默目だと地獄に遊びに來たカントなりして言はしめたり」と成る程カントの美は其意極めて狹し去れど森君が「大は美の極のみ」と云へばとてカントの大とカントの美を混合したりとなし難きが如くヘルバルトが善は人事の美なりと云へばとて森君の善と森君の美を混合したりとなし難し要するに教系の主旨と組織は用字の意を狹小にし又た廣大にす名は實の賓なりと知れ。

殊に衝突に堪へざるはカントを引合に出したることなりカントは善と美を區別しながら[illegible](美と大)を善(道德の)の影像たらしめんとせしにあらずや識しカントの道德偏重は今に知れたるにあらず既にシルレルは一轉して德の美に導く如く美も亦た德に導くものなることを主張せり一字一句を精讀して大家の精神を穿ちたりと思ふは所謂る眼光の紙背に達せざるものなり。

天美と術美　天美は絕對的の美にして決して術美の企て及ぶところにあらず蓋し自然は絕對の全智全能を示すもの創造力が絕全の現實を得たる者なり術美を除て天美を棄つるは恰も小兒が平凡の綺細を愛して探險の崇高を好まざると一般ソロモンの裝は野の百合花に如かず森博士には如何が思召めさるゝ乎。

さは云へ人ハ神の肖像なり美術亦た製造するなくして可ならんや去れど製造の意は比較的にして美術は實に比較的の模倣をなすものなり蓋し想力の想を作るは材を自然より得て其形を製するのみ森君も之れを許して「空想の美を得るや自然よりす」「多少の塵埃を想火にて焚き盡して美を成す」「實際に醜きものも之れを寫せば美しくなる」と云へり第五十二號に「余は既に想火にて物を焚き塵を去り美を存すと云へり」即ち物中に塵と美ありと云ふも同じ意なれど「自然の美は塵を含めり」即ち美中に塵ありと云ふは論理の誤なり。

極美の美術　森君は美(とは云へど只た高を引て論じ剗さへ汚物を蕩平して高とせられたり)と不德の併行し得ることを說き來り突然「極美の美術なるものは時として不德と伴ふことを得べし」と云ふ奇怪なる論法にあらずや苟も美と極美を區別する以上は其差を示さゞる可らず惟ひ美は不德と併行し得ると假定するも未だ極美と不德の併行し得るを證したるにあらず察するに森君自らも極美なる語を以て何を云はんとするか御承知なきならん美術の極美とは材と形の二つながら完きものにして不德の伴ひ得べきにあらず。

森君は第五十二號にて善、眞、美の極が同一躰なるの證據を求められたり森君も物質の波動が色とも感ぜられ音とも感ぜらるゝことを知り玉はん善、美、眞が智の想即ち神より出づるものなりとせしはプラトーなり(森君がプラトーの善を美德と同一視せしは誤なり)眞、美、善を智、情、意に對する「完全」の現象なりとせしはバウムガルテンなり且つ「善外に美なし」とすれば善と美との區別も立たず」と云はゞ「美外に大なく大外に美なし」とすれば美と大の區別も立たずと云はざる可らず三位一躰論にも取り處ありヘーゲルの如きは特に之れを珍重す余も森君の美術論よりは明かにして而かも面白しと信ず。

○柳の枝四條

殺城山人

山人此の頃或る人に柳里恭の隨筆を借り來り一讀したるに書中面白く思へること少からず左に其二三を記しておわらひ草とす餘白に塡め給はらば幸甚

(一)腕前のある女房

ある人時刻を知らん爲にとて自鳴鐘を求めんとするを其妻これを止めていひけるは明くれにかくる世話のみにあらずくるひたる折柄にはその隙を費し自鳴鐘の爲にかへりて時を失ふこと多からんやめ給へといへばさあらば庭鳥を飼べしといふにその妻又たとゞめて云ひけるは時刻は人のうへにあり汐の滿干もこれと同じかるべし自鳴鐘を便りとするは勤に怠るものゝいたすとありと夫を諫めつひに鷄をも飼ずありにき。

(二)愛情の眞理

夫婦の中のしたしみも禮わるうちは珍らかにして其情至て深く又厚し禮を失ふ時はその情自然と薄くして離別もまた遠きにあらず仁義遜讓は禮を厚うするの中だちにして此の禮媚諂

ひと脊を合す智は痴とさしむかひ誠は嘘と隣れりさわれば心安だてと愛想づかしはいつも同居と知るべきなり。

(三)醜き美人

有馬に湯あみせし時日暮て湯桁の中に耳口鼻のなき瘦法師の獨りとぼ〳〵と入たるを見て予は大に驚き物かげより覗ふうちさう〳〵湯あみして出行く姿骸骨の繪にたがふところなし狐狸どものわれをたぶらかすにやとその夜は湯にも入らで臥しぬ夜あけて此事を家のあるじにかたりければそれこそ折ふし來り給ふ人なり彼女尼は大坂の唐物商人伏見屋てふ家の娘にてしかも美人の聞えありけれども姑の病ておはせしとき隣より失火ありて火のはやく病牀にせまりしかどたすけ出さん人もなければ彼の尼とび入りて抱へいだしまゐらせし人なりその時燒たゞれたる疵にて目は豆つぶばかりに明て物見え口は五分ほどなれば食ふに事たり今年はや七十歳ばかりと聞けりといへるにいとあり難き人とおもひて後も折ふしは人にもかたりいでぬ。

(四)家の竈は神聖なり

飯釜の賛に萬鎰に募るの勤めにおけるや明くれいとま明なければ飲食に乏しからず人の世にある是をひとし此もの丶徳たる孝に錙底の焦を削りて冥理に湯の粉の洗ながしを捨ず驕はわづか茶飯に酒の半椀を加へ儉はあまねく大根葉割麥の粮を守れり日々に琢磨の功成りてひとり家内の繁榮を照らす。

姉さんちさも見えや
ーないわ。

姉「何がさ。

妹「香水てな香う斗りで見へないの子ー。

○身のほどの悔み

井の内の蛙は大海を知らず人は氏より育ち、左る下男上京邊の數寄者のもとに一季奉公をつとめける、左れば下々のものの習ひに前の主人を大方そしる物あるが或る時友だちの男に途中にて行あひければ其方ことしはいづ方に奉公をすると尋ねける、上京室町に居ると云ふ、何んと今度の主人もしわひやつかと問ふ、左れば此四五日奉公をするが何如さま前の主とちがはぬしわひ者と見えて此中も客五人あるに茶を一ぷくたてたと云ふた。

○約束かたき向ふ齒

金銀藏に滿ち萬づ事かゝぬ人あり一藝あるものは何によらず

召し抱へしに成程たくましき男來りて私しは齒をくひしめてからは例令へば鬼が來ても開けませぬと云ふ、夫も一興じやとて抱へしが此上は身供が申しつくるとは何にても異儀はあるまいと云ふ何がさて生命にてもお役に立ましやう、それはたのもしきとなりと喜こび月日を送るに彼主人たのみ少なきわづらひにて今を限りと思ふとき件の男を近ふよび、日ごろの約束はこゝじや己は命ちが惜しいほどに其方死んでくれといふ、かしこまりました身がはりに立ましやうと云ふ、常々おれは大きにうそをついたほどに己が代りじやと云はゞ定めて鬼どもが舌を拔くであろう、其時たしなみの齒をくいしめて開けぬと云ふ、これも口すぎで御座る心得ました。

○臍にかへてつかむ白銀

どつと昔し女媧氏と云ふ人天のそこねたるを補はれしと云ひ傳へたり、其比雲が古くなつて所々のやぶれより神鳴をつるとたび／＼なり、左る兩替屋に落ちて亭主のがさぬとおさへければ、わるひなふかなしやと聲を上げ年よりますれば臍がひつこんで御座らぬ是でかんにんなされて下されと五百目包を出せば欲のふかき雷公にて取りてかへり天上にて太鼓の張賃にやれば、何が道すがら火に燒しゆへ燒金はとらぬといふ夫れて一夕もつかはれなんだ。

○梅法師は昔しの皺

正直は一旦の依怙にあらずとかや、ずんと孝行にて涙もろき人左る方へふるまひに行かれけるとき手皿なる筍羹を見て箸をからりと棄て涙をはら／＼とこぼされければ、亭主膽をつぶして是は何となされたといへばあの梅干を見ましたれば死なれた母じや人の事が思ひ出されて歎きますると云ふた。

兒籃

○乙女亞利斯（三）

波月子

此頃タイガーの山に住む賊徒の頭デシユーと云へるもの王宮に忍び入り紅玉の寶器を奪ひたるよしにて時の政府も種々其討滅に力を盡されしにデシユーと云へるもの神變不思儀の巧ありて其住家をさえに顯はさす御門はいたく御心を腦し賜ひて一萬弗の賞金を出しその賊の住家を知りて報知する者に與へんと布告されました王の侍臣にヨダナと申す勇士がありましたが帝の深くデシユーを惡み賜ふを知りて或る夜宮中をしのび出てそのまゝ自らタイガーの山へ趣きましたヨダナは何卒帝王の御心を安ませ奉らんとの望にて夜を日にいそぎて三

日を經よう／＼にタイガー山へ着しましたそのゝち自らを獵師にいでたちまして日々山深く獸を逐ひ鳥を打てデシニーの出沒を探らんと思をこらして居りますれど一向に分りませんある日朝早くより相かわらず道なき所をわけ登りましたが草村のうちに一枚のまだ新しき上着の落ちて居るのを見付ました故手に取て見ますると絹上着のまだ新しきものにてガンパーと記してあります。ヨダナは心のうちに鄙には稀なる此上着正しく盜賊共の落したるものと鑑定をいたしました、何人か拾ひに來べししばし樣子を伺はんと傍の松が枝にのぼり最も高き梢の茂みに身をかくしたとは少しも知らぬ小盜人はうろ／＼しながらはるか彼方より歩み來りましたがヨダナの居る松の下に來りかなたこなたを打ながめかの上着を見出し背に負ふて一散に走り出しましたヨダナは高き梢より後を見おくり聽てよき時分に下り來りて彼の小盜人の跡を附て行く事凡そ五六町一つの谷に下り行きましたヨダナも續て進み行くに石造の大門を遠くに見得る事が出來ましたその後常にかの谷間へ趣きて隙もあらば忍び込まんと待ちかまへて居たのです。時に或日彼の石門を八文字に押開き四五十人の手下手に／＼得物を攜へて何處ともなく出て行きましたヨダナはいそぎ石門の傍に行きて內の樣子を見るに二三人の番人の外は一人も見えませんヨダナは彼の石門を押開て進み入りましたが驚く可き壯麗です、ヨダナは門を開て入り込みし爲めに急に帝王の紅玉を持ち歸へらんと客殿の方へ進み行くろの足音に走り來る二人の盜人ヨダナは非常の勇者デスカヲ討て蒐る盜人等をさん／＼に惱したるのち寶藏に案內させかの紅玉を袋のまゝに取り出し懷中し麓の方へと立去りましたこの時はテウド六時頃でアリスがモイソンの處へ藥を取りに行く刻限デシタ、小盜人はヨダナの爲にさん／＼の日に遇ひたる故にデシニーの歸りを待ちに待て居りますと一時餘を經てデシニーは三匹の馬に多くの金銀をつみのせて歸り來りましたが小盜人が話しを聞て顏色赤くなり青くなりそれ追かけよと下指を傳へふたゝび麓の方へヨダナの後を慕て追ひかけマシタ。

史傳

晉子其角の句は斬新奇巧にして往々意表に出づる例へば英一蝶の畫に於けるが如し故に今に存して解すべからざるもの多し辭世の句に「猫のあかつき近しきり／＼す」とあるにても知らる。

文に於ても又斯の如く一種奇抜にして豪放の情隱然其中にあるは他に見るべからざるなり高名なる嘲佛骨表の如き脫俗の文字に嘲弄諷誡の意を寓したるは豈風來が疎雜野鄙の類ならんや。然も其才は唯豪放奇抜に止まらずして閑寂幽玄の文字にも巧なるは次に抄する終焉記を見て知るべし。謹嚴なる文字を連ね婉

雅なる句を飾らず、而して情を其中に求むるに到つては其角が文にすら稀に見る處なり、文は比喩造語を以て傑きにあらず唯情あるを以て傑しとなす。

○芭蕉翁終焉記

晉其角

そも／＼此翁はその身貧窮なりと雖もその徳の風雅に富めるや二千餘人の門葉ありて爽洛ひとへに合信する因と縁とのふかしぎなるいかにも看破しがたし。されば天和の比ならんか武江の草菴に急火の難にかこまれ、潮にひたる筈をかつぎて烟の中に生のびけん是ぞ玉の緒の敢果なきはじめなるや。爰に猶如火宅の變を悟り應無所住の心をはなちて其次のとしは甲斐の山里に身を隱し富士の雪のみつれなければや三更月下入無何と云ひけん昔の跡もなつかしかればそこの人々は嬉くて燒原の舊草に庵を結びしばし心を留むべき便にと一株の芭蕉を植置てたゞゐに雨を聞夜とはその世にその時の吟なれば人はをのづから芭蕉の翁とも呼ならし。其北に圓覺寺の大巓和尚とかや易にくはしき方おはしけるに或時此翁の本卦を見て卒といふ卦にわたれるよし是は一もとの海の風に吹れ雨にしほれてうき事の數のみしげけれど命つれなくからうじて世にあるさまにたとへたりされども其字をあつまるとよみて其身はひそかならんとすれどもかなたこなたに事つどひて心をやすんずる時なしとぞ誠や聖典の語に感じて彼草菴に入來る人々の道をしたひ風を學びずといふものなし。かくて貞享のはじめの秋は大和路やよし野の奧までもたづね行心のくまを殘さずとく／＼の水に袂をしぼつて是より人の見ふれたる茶の十徳に檜木笠いかめしきわられに風狂し身を竹齋の凩に吟行して其名の東西にひゞくより永く正風の師とぞ仰ぎける。禪は本より佛頂和尚に嗣法してひとり開禪の法師といはれ一氣鐵鑄生といへるいきほひながら老身もやゝくづほるゝまゝ句ごとのからびたる姿まで自然と山家集の骨髓を得られたる誠は我道の杜子美にして貧交やゝ人にあつく宗鑑が洒落もをしへの一かたならんむかしは象潟に能因あり木曾路に兼好あり二見に西行も高野に寂蓮も越のたよりは宗祇宗長しら川には兼載の草菴ありていづれも此道の故人ながら我翁のまぼろしにつきていざや／＼とさそはれけん行衞のそらもたのもしくや慈鎭和尚の旅の世にまた旅寐してとよみ給へるもこれらの境界に思ひあはせて四たびむすびて四たび住すてし深川の名殘も此限なるや。ことしは伊賀の古里にかくれてしばしの閑素をうかゞひ給ふにされ心ある人に見せばやと津の國なる人にはまねかれてそこにも冬籠の便あらばとせちに思たち

給へるも例に道祖命のすゝめなるべしさるは長月の晦日のほどより泄痢の勞にたふれふして物いふちからもなく手あしもとほりぬるまゝにあはやとあつまる人々の中にも去來丈草は洛より來り乙州木節は大津より來る膳所の正秀も平田の李由も支考惟然も本よりそこにありてをの／＼針藥の供給をつくし父に仕るは其子にもまさり子にをしふるはその父にもすぐれたらんかくても木節が藥にあむ死期までの脣をうるほしてむとその後は人にもあはずなりぬ。されば其角はある人にさそはれて和泉の淡の輪といふ所より吹井のふねの浦づたひして十一日のゆふべ難波につきて先は翁の行衛たづね侍るにかくなやみふしおはすといへば思ひかけず胸つぶれてその病床にうかゞひより此ほどの覺束なきをのぶるに力なき聲の詞をかはすのみなり今は年比の志ざしもかよひ住吉の神のひき立給ふにやとかつうれしみかつかなしみさて十二日の申の時にはかに死顔うるはしく眠れるごとく此世のいきもたへはてぬらん人々あきれたるばかりにこそ。其夜ひそかに長櫃におさめ商人の用意にまぎらはして川船にかき乘するに具しつるもの十人あまり皆もる雫に袖さむく旅寂うぞあれ／＼とためしなき寄緣をつぶやき稱名も觀法もひとり／＼の心にして年ごろ日ごろのたのもしき言の葉むつまじき教をかたみにて俳諧の光をもうしなひなき人の名のみまたふべききのふをけふのむかし物語となりぬもしや松島のまつ便も遠く越の志らねの志らぬはてしにてかく味氣なき事あらば聞て驚くばかりならんに一夜もそひてなきがらの風をいとふは此人々のほゐあらぬかは此期にあはぬ門人のなげき是より思ひやるもいくばくぞや。さてしも鳥にさめ鐘をかずへて伏見は明ぼのゝ霧のまぎれより湖南の義仲寺に棺を移して近里遠境の名を傳ふる人はまねかざるに馳來りておよそ三百餘人あるべし。墓は木曾殿の塚にとなりてをのづから古びたる柳もあればかねては終焉のちぎりなるやとそこに野面の無縫塔をまねびあら垣をまわたし冬枯の芭蕉を植て其名の記念とはなせりとぞ。げにも所はながら山や音羽の峯もちかければ鳰のさゝ波も叟によせて漕行く舟も觀念のたよりならずや樵路の鹿田家の鶴すべて湖上の月に映じて此廟前の風景となれば遺骨も永く此地に淸からん。さらば其さかひもはるかに其ほども遠く風のたよりに我翁を慕はん人は爰に此記をもて廻向の便とすべし。

○虎御前の眞蹟

右本誌第一葉に掲ぐ、之に付末松謙澄氏の寄書左の如し。

（上略）虎は兼々鳥渡聞たる所にては矢張遊女のやうに存じ居り甚だ少しく烈女の價値を損せしやうに有之候處該地方の口碑に傳ふる所ろなどを聞くに決して去るものには無之全く長者の娘にて于今其長者（即ち露木長者）の子孫も存し居り又其親族なりし近村の神官某の家も現存せるさか又東鑑に記する所ろ（西行堂中に石碑に刻す）にて見るも遊女とは見え居り不申別冊中にも略傳有之右等事實少しく御穿鑿ありては何如ん（下略）

小説

○酒鬼

佳 耦 主 人

主人此ほど病にかゝれり、詮さるの力らなし、一回丈け休みたしと立つて申せば、茲に伏して諸君に謝すo

○眞才子

東都 麻 溪 居 士 作

上卷

されば此處でこそ無情の花
は却て有情の花になります

太陽——朝から照らして居て、漸く草臥れて來ましたか、今山陰に息を入れて居ます。大魔が時と云へば凄く思はれますが、黄昏と云へば風流に聞こへる夕方。燈を付るにもまだ早いと、薄闇いなりの一ト室の中、語をして居るのは二人の男——乃ち私と私の師匠です。

師「それは今日ですつかり出來上るのかい

「エツ……此……共進會へ出すのですか。エヽどうかかうか……此楓の葉へ朱を加へればそれで宜しいのです。

△「なか〳〵手ぎはに出來た……ム、面白い。少し此田舍屋の垣根の蔦が赤過る樣だが……マア宜いだろ「さうでございますか、もう少し早く仕上る筈でしたが、大層永くなりまして……。

△「それが出來あがつたら、あの眞美社から賴で來て居るから、あの畫を書て置てくれ、下畫は來て居るから。

「ハヽイ宜しう御座います

師匠は煙草を薫らしながら、暫らく無言で私の畫を眺めて居ましたが、何か思立た樣子で、

△「昨日八條さんの御邸へ行つたら、一ツ難題を出されて餘り困つたから家へ持て來たが、御前一ツ考へてお吳でないか、

「へー、難題……どんな事ですか。

△「隨分六ケ敷事だヨ、奥へ向ひ聲を張り上げて、

△「お花。お花居るかい

一間隔てた向ふの居間で――鶯の初音――優しき一聲。

花「ハイ。何で御座います？

△「あの床の間に、獅子の置物の傍に、白堊で作た花があるから。あれを持て來ておくれ。‥‥そして其地袋の上に繪絹があるから、それも‥‥。

花「ハイ。

暫らくして

花「是で御座いますか。

△「ム、それだ、よし／＼、用があれば呼ぶから奥へ行ておいで、

娘は（ハイ）と、返事を殘して立てゆきます。其後姿――私の目からは殘り惜氣な風情です。師は白堊製の木蓮の花を私の前に置き

△「此花だて、昨日行た時（此花の上にある二輪は白木蓮で下の一輪は紫色の木蓮だが是を墨計りで顯せまいか）と言れたのさ、おまけに（外かの畫の具を使へば兎も角も。墨ばかりで紫と白の花を出すのは出來る話じやないが、お前は繪で活計を立て居て見れば、それ位の智恵はつきさうなものだ）と言はれたから、殘念で堪らない。殘念だが其場で硯と筆を借りて、此花だけ寫しても、肝腎の紫の色が‥‥。どうも困つてしまつたのサ。それでも出來ませんと言ふのはいやだし、何か謎の樣な物だらうから考て見ましようと言て、持て來たがどうしたら宜かろう。

「これは難題でございますナ。此繪絹へ其花を墨で寫して、下の一輪だけ少しも繪の具を使はないで、其花の色を見せるのですナ。

△「さうだ‥‥繪の具を使はないで‥‥。

「實に難題ですナ、

△「お前一ッ考て見て呉ないか。（ナニ六ケ敷はありません一週間もすれば考へて見せます）と言切て來たのだから、どうなりかうなり其返事をしなければならない。

話しながら私の擧動をヂット見つめて、其難題の事よりは、私の出來るか出來ないかを試す樣です。其上眼の底に笑を沈めて、自分が困つて居る樣子が見へません。ですから私も、此難題よりは却て、其の師匠の處置が解し悪いです、不審でたまりません。が、次の言葉ですつかり解りました。

△「そして殿様がおつしやるには、（お前それが出來たらおれの首をやる、‥‥何でもやる）と戯談半分に言はれたから、

一番考へ出して、こまらせて、充分ねだつてやらうと思ふけれども、どうしても出來ない。だからお前、……考へ出して呉れば、ろりあもう何でも……、力に出來る事はしてやらう、――此花のためには――、

此一言、――言葉の上ではそれと顯さなくても、此樣な難題を出して、私の才智を試す心組……としか思はれません。そして其語氣で見れば、私は到底此難題を甘く仕遂る事は出來ないと考へて居るらしいのです。殘念です、是が出來ないと斷て、才智に乏しいといふ事を示すのは。――一心凝せば墨色が紫に見へる工夫が無くもありますまい。若し出來ないと言ば、私の平常の望、――あの眞美人花子との結婚は出來ないとあきらめなければなりません。此宿望――、私はどうあつても出來ない迄もやつて見樣と云ふ精神に飲まれました、其強さ――此の花の紫の爲めにいざ現さん心の紅――、ぜひと言ふ精神に勵まされて

「宜しう御座います、私がやつて見ませう。

△「少しは思付た事が有のかね、

「イヽエ、まるで考へは付きませんが、出來ない迄もやつて見ませう……、貴師も御考へなすつて下さいまし。……日限は何日迄です

△「今日は七日だから……十日の晝過までだ

「宜しう御座います、

△「きつといゝかへ、……きつと、……若しお前がそれを甘く仕逐げればお花を、……イエサ其花を墨ばかりで紫の色を出したなら……、きつとお前の滿足する樣なお禮はするから

「御請合は出來ませんが、自分ではどうかしたら出來るかと思ひます、

△「じやあ、して御覽。……然し……若し出來そくなつたら別にお前には御禮はしないョ

「出來ない時には……勿論仕方がございません

△「ハッ、宜しい

師匠は約して室を出て行てしまいました。後に私は件の花を手に取り上げてホット一息

そも此花――息も通ず言葉も發せず――唯無情な一枝です。此「無情の花」の爲めに苦しまされる元はと言へば、溫な雪の膚――朱を奪ふ唇――甘き言葉を吐く「有情の花」です。花の爲めに花に苦しまされる私。――折々枝の蕾無殘にも散て地

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

にある殘紅に、枝にある花を恨む心です。――「無情の花」――一枝の花に、二色の花瓣。どうしたら其紫の色が寫せませうか……、若し寫す事が出來なければ――「無情の花」の恨は心に留つて、「有情の花」はあはれ外の水瀬に流れてしまうでしよう。無殘な――紫の花一輪、戀しい――紅の花一輪。「有情の花の爲めに、苦んで吐く血の紅。――「無情の花」の爲めに、心を痛めて寫す紫。ですが其紫は墨には寫せません。どうしたらこの一輪を紫に――さうしたらあの一輪を手の内に。私の心の程……

寄書

○女子職業學校福引　　しづの女

去る五月廿八日皇后陛下御誕辰に付學科を休み教員生徒一同學校に集まり陛下の萬歳を祝し奉りし末餘興として福引を爲し出品五百餘もありし其中秀逸と思はるゝを左に、

金二百圓陛下より學校へ下賜	玉子一箇	君の眞心こめし玉物
東京の眞中	二本箸	日本橋
大統領國と共に此箱の内にある	米そんじ針	米國大統領ハリソン氏
專賣特許己惚早寫器械一式	鏡	
材木やのうり物	胡瓜二つ	木うり
鋏刀	半切	半切れ
大石義雄	唐からし	赤穗家老
他人いらず	團扇	うちわ
東髮	卷紙	卷かみ
かわいゝ子	足袋、針	旅をさせよ
赤飯一重	石盤一枚	
おあし入	足袋	お錢入
ほんにおかしい	書籍、菓子	
春のあらし	ハンケチーフ一	花をふく
二條院讃岐	手桶	かわくまもなし

開書

○池袋大人へ呈す　　賤の屋　みやび

池袋大人の御教のさちを蒙り我儕もいさいさふ文の道に心かけざりしをうらみ合せて大人の御懇にもよくこそ心づけさせ給ひしを喜びたゞちに禮さは思ひ侍れどかゝるひがとの思召にをはさねばむしろ御教に服ふの本意にもやさ思えばそゞろにうちもおかれず發に雪にも侍らねど夜を日に餘念なかりぬるうの結果ぞさみそなはせよ。

愛宕の峯に出養生中我家の大人を訪しに

久しくうち絶えて候ぬ我家の大人に御變らせ給しとのをはさすや我儕はさちあしくも過きにし月の中つころふと病の心持して洛の西なる愛宕の峯の片ほとりいぶせき一間に引籠り唐異邦の書はしもいふもさらなり大和ふみすら見るに懶く心もふさき氣も結ぼれうたゝ家郷も懐出られいともあはれの光陰を蓉らし侍りぬ浮世の瀬よる逸渚さの捨小舟言問ふものも嵐山吹く木の風の音すのみ淸き流れの淸瀧もその行末は白糸のみだれかちなる胸の裡悲歎に今日も日蓉らしの灘の響もいさゞなほあわれを添ふるばかりなり右つれ〴〵をなぐさめんとてうかゞひまいらせ候かしく

愛宕の峯にて　　速成ふみの

八幡の峯より播磨潟を眺めて

雲につらなる　播磨潟　たゞよふ　船は　あなたなる　雲井の
端の　天がはら　天津　をとめの　言傳も　ありもや　せんさ
いと　こひし

同じ題にて

見渡せば遥かあなたの海ばらを往來ふ船のおもしろきかな

同じ峯より唐琴の海峽を眺めて

松風や八幡の峯に唐琴のしらべの音のおもしろきかな

東路さして旅立んとて

行くさきは如何になるとも吉野山花咲きにほふ春もあるらん

右は速成文子が速成のものにし侍れば願ふはゆるやかなる御沙汰をもて深くお咎み給ひろ先づは御高意に酬ゆるまであらく〳〵かしく

時事 （本號餘白に乏しく不得止六號字に改む讀者諒焉）

○高等女學校

高等女學校に就ての醜風評紛す激烈なり、抑そも之を如何にすべき。之を新聞社に質さんか、新聞社は實に顯々たる風評を記載するものなり、但夫れ之を合報するが故に大業に見ゆるともあらん然れども特に報道するもの少なし、現に高等女學校縁故の人々にして尙ほ同樣に風評するものあるを何如んせん。然らば則ち其の實況につきて之を吟味せんか、若し彼の衝突事件の調査極めて困難なるを知らば、如此き事件の實否を窮るの頗らに一層に難たきを知らん、女學の路に當るものは固より深く警戒すべし、然れども其の學監の最も困難なるを何如んせん。

○文部大臣及び高等女學校々長

然れども文部大臣は決して之を此儘に放置せらる可らず、其有無を質さるゝは勿論官制上の義務なり、尙且つ內務上の義務なり、又教育上德義上の義務なり、而して其の有無によりて風評者に對するの處置を爲さるべきは更らに尤も正當の處置なり。高等女學校々長に至りては果して如何にせらるべき乎、抑も官立校長の責任は少しく私立校長に異るものあり、たとひ好し其實事あらずとするも、既に如此き風評を受く旅租税を上納するの日本民に對しては聊さか恐懼せらるゝ所ろなくんばあらず、特に足下不羈蕭雑にして細事に頓着せず足下の一身に於ては蓋し樹藏する所ろあらざるべしと云へども、然れども彼の女學生が榮枯盛衰に關しては此等の細事の極めて大事なるを思わざる可らず、足下が無頓着なるは些さか男らしくもあらん、然れども之によりて彼の愛すべきの女生に女らしからしむるを得すんば何如ん、國家の公事は民間の一私業に異る、足下宜しく速かに冠を掛けて人臣の德を完ふすべし、而して此事の實否の如きは足下去るの後に於て自づから明白さならん。嗚呼此等の事件にして若し私立學校に起らば吾人は如此く論ぜじ、たとひ公事さ云へども若し其他の事業にてあらば吾人は亦如此く論ぜじ、たゞ夫れ官立の女學校に關するの事なるが故に、吾人は私交上の情念を制し敢て忍んで如此く論ぜざるを得ざる也。

○矢田部校長書

某あり、君に語る、君は世上の人宜しく何如とも云へし、若し毀譽褒貶に關りて事を爲さば何事も成らじ、近頃の風評の如きは殆んど馬耳東風に委すべき也と、其諫めて曰く、君が學勝にして自信の厚き余れ甚だ服す、然れども人間は責めらるゝとを好み惡ろく言はるゝとを厭ふ、故に斯く明言するこそ寧ろ其正直なるものならん、人は決して特更らに敵を求む可らず、成るべく丈け用心して細謹たるを可さす、君願くは明らかに風評に對して辯じ、且つ此際深く注意して少しく粗放を止めよさ。吾人亦た切實に如此く言はんさ欲す。

○高等女學校々長の候補者

日本新聞は云ふ、白髮にあらずんば女學校に關係する勿れさ、日々新聞の投書家は云ふ宜しく加藤弘之君を校長さし、杉浦重剛千頭清臣兩氏の一を教頭とすべしさ、而して文部省中に於て大臣に一の建議を爲すものあり云く、若し所云る月の如く花の如き野勢君にして尙ほ不可なりとせば、本省濟々たる美男子中、此上は辻次官矢野二郎君の一人に御苦勞を願ふの外あるまじさ。

○余が身上　　巖本善治

風評の流行する所ろ終に亦た余が身上に迄で及ぼし來れり、余が友人等の規定する所ろに據れば、江戶新聞本月十三日に掲載したる「保護の深入」と題するものは、暗に余が一身に付き言ふものゝ如しさ。果して然るか、余は今の時勢に對して從す盡力せざる可らざるの義務を覺悟す、嗚呼世人もし德義上に於て余が一身に責むる所ろあらんか、余の自ら恥づる所ろは明らかに之を謝すべし、而して自ら恥ぢざる所ろの者は余れ「來りて見よ」さ云ふの外に答論せじ、但夫れ論旨法律の區域內に關わり、若し余を毀つて日本政府の法律を侵すものとなすに至るあらば、余は一個の日本國民さして決して之を容赦せじ。

○國權を擴張するは男子に在り
　蠶業を振起するは婦女にあり

群馬縣著名の養蠶家田島氏くに子は日本蠶業雜誌第十九號に於て曰く、

人は二主の僕たるを能はず産を殖やさんか政事上の運動を如何んせん政事に周旋せんか家事の不整頓を何如んせん斯の如き感想は今後我國の有志者愛國者の脳中に必らず攻擊し來るべきの一事なり……則ち自今女子權利の區域を廣ふして女子は純然たる家計の主宰となし男子は暫く家事に離れて自由に安泰に運動するにあり……而して養蠶の業を婦人の手に歸し以て女權再興の爲に千歲一遇の好機を與へ以て男子に活潑の資料を得て其政事上の運動を逞ふせしめ以て內

外相卿として其良効を奏せしめん、有爲の男子名望家をして家計に煩慮せしめず議會の報酬に頓着せしめず活潑清廉なる帝國民の元氣を養ひつゝ國權擴張十二分の成効を與ふるは具に淑女の發達に一因すと云ふべき也。

其人務々議堂に論じ、夫人家に蠶を養ふて生計を計る、嗚呼吾人が如此き帝國民の繁殖せんことを希ふや一日にあらず。

○日本國の美人

教授ドクトル、ベルツ氏が日本人類學に云く、

日本の婦人は二種に區別すべし。上等婦人は身躰細長にして顏面長狹、鼻高長、口小、四肢嫋弱にして所云る柳腰纖手の風姿あり、之に反して下等婦人は顏面及び全躰並に其各部の幅經短かくして軀幹及び四肢も短厚肥滿す。

而して所云る柳腰纖手の美婦人を更に解釋して云く、

風姿度を過ぎて病體を形ちづくり雪白の皮膚は光澤を放ちて觀者の瞻を惹からしめ人を視るの睇子は黒く眼の胸裂は狹くして兒眼を擬し雙頰微紅を潮するの顏は纖躰を傷くるの感想を懷かしむ風に對するの花月に觸ける趣ありて之を辭すべきや抵抗力は少にして之を測定すべからず些少の外襲暴威と雖も强大の反應を以て之に應す況んや一朝病魔の侵す所となれは忽ち黄泉の客とならざれは終身病床に呻吟するの患を免かれず生來孱弱にして欠點ある身躰は不當の躰育に因りて之を自乘し可憐なる婦人の過半は勞瘵の猖獗する所となりて肉躰に精神に自由の配下に立つ能はず内に在ては無聊に苦しみ外に出ては息迫を訴へ錦繍の粉裝亦是何の益かあらん衛生上の眞美婦人を此社會に見出すは稀中の稀なり望むらくは血族或は近親結婚の習俗を廢して完全の躰育を加へ婦人の品位と道德を傷くることなく有爲活潑の子女を養成せば東洋の宿弊たる男尊女卑の習慣も之を擺脫するの日蓋し遠にあらさるべし。

ベルツ氏も亦多情の改良宣言者なる哉、深く謝せざる可らず。

○女子實業振興會

藤本左近なる人吾社に慷慨の書と女子實業振興會經營方の意見書とを寄せて云く、資本金三萬圓を募り、本會建築に一萬圓を投せし、傳習所を造り、雜誌を發行し、若干の利益を擧げ、女生を教育し、以て國權を張り女權を張り公益を起すべしと、則はち其創立披露の音樂會を江東中村樓に開けり、吾人は日曜日なるを以て參會せざりしに、之を聞く招かれて行しものは茲に藤本氏を見ず銘々會費を拂ひてすごく立歸りたりと、嗚呼此れ何の事かや。前年女子授産會社を設けんとしたるものあり、而して今亦た如此き會あり、大凡そ實業上の事は特に尤も實着なるを要す、而して其の特に尤も不實着なる多きは何んぞや。

○獨立女學校設立

種田成子、加藤さし子、水野みね子の三女史之を發起し、多くの伯子爵夫人之を贊成し、近日獨立女學校なる者を起さんとす、此は貧賤にして自から學資を給し勉學しがたきもの〻爲に設くるものにして、半日職業し、半日學問し、所云る其手ずよりて文字を見出すの主義に成るなり、其創立主旨書に云く、

故に我等計て思へらく此に一の職業所を設け此等の人々をして銘々自ら支ゆるの職業を學ばしめ之に因て先づ自立の道を與へ而して傍ら學問を爲さしむるときは則ち此人々の志を遂ぐることを得併せて我等の懷を達するを得べしと因て去年九月府下麴町區上二番町に假りに職業所を設け十三人の生徒を寄宿せしめ一切の費用を給し午前は英學和學の一と通りを學ばせ午後は縫取洋服裁縫の手藝を教へしに僅かに半年間にして其成績著しく顯はれ今はハンケチの縫取或は洋服の仕立等を以て每月若干の資金を得て各自獨立の生計も岌ぼ差支へなし。

既に半年の經驗を得て而して後ち漸やく規模を擴張す是れ實に最良最賢の處置たり、たとひ慈善上の事業と云へども當に常に如此くなるべし、之を如何んぞ其の然らざるものをや、經驗あるものは云ふ、山師の山は大抵成立ちがたきもの也。

○米國に於ての知己

米國ペンシルバニア女子撰擧權擴張會の通信書記ハルリエット、ピウイス女子吾人に書を寄せて云く、

(上略)足下が日本に於ての事業を過月の本會月次會に於て詳述したるものあり諸員皆な非常の面白味を以て謹聽したり願くは向後尙ほ足下が事業の進步を聞くことを得亦た足下に何等かの書籍を送り其の御役に立ち得ることを報告せらるゝを得ば幸甚なり(下略)。

外國に日本女子の眞況を悟りくるゝものあらば喜び何ものか加へん、蓋し日本の女子は道德上歐米婦人に劣る所ろ少なきもの也。

○米國伉儷の眞況

米國の男女が結婚の後其情交は果して如何なる有樣なるや今或人の言に據れは米國の婦人程物淋しきものはなし如何となれは常に其夫と共に在ることを得さ

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

ればなり米國は元來繁榮の國なれば從て男子の職業は頗る多忙にして誰一人何の爲すこともなく其日を送るものはあらず通例夫たるものは日々起出て急ぎ朝餐を終るや否や直に其事務所に赴き終日外に止りて漸く夕方に至りて遲く家に歸り晩餐を喫す左れば大抵は各々倶樂部又は其他の組合等に屬するを以て其終るや否や再び所用等ありて直に之に赴き然らざれば銀行又は取引所等に行き物價の相場表等を調べて將向等の事を考へ又時に家に在りて客に接するとあれば出でゝ人を訪ひ然らされば劇場等に赴くを常さす故に夫婦打揃ふて家に在りて十分間だも互に親しく相語ふことはあらざ實に米國の男子の多忙なることは恰も滊車の中に在りて生活しつゝある者の如く毫も共婦と相樂むの時なし輓近に至ては男子の生活は益發達して其職業の範圍を廣くし女子の生活は益端屈に陷り只だ些々たる家事をのみ其身に引受くるに至れり偶々男女相伴ふて彼の小說中に見るか如き愉快なる時を送るものなきにあらずと雖とも此は一般の事にはあらず左れば遂には夫婦の間は全く別世界に住むか如く相隔るゝに至らんさ云ふ嗚呼亦た忙しき社會かな（The Steamer.）

○日耳曼の女況

日耳曼の女況は益々進步す、彼のライプシック女子同盟會より貴族院に呈出する女子高等教育及び女教員雇使に付ての願書は、たとい幾度許可せられざるとも必らず許可せらるゝ迄出願するの希望なるよし。又近頃ろヘレナ、ランゲ孃が著したる女子教育論（Frauenbildung.）は大ひに世人の注意を引起したり、中に云く歐洲列國中女子に男子と同樣の教育を與ふるとを許さゞるもの只だ三國あり即はちホンガリーとトルキーと吾が日耳曼國これ也、彼の佛蘭西の如きすら既に吾國に優る萬々、彼國は一千八百六十六年以來一百〇九の女學生に學位を與へたり、又瑞士亞ス非ソツルランド荷蘭スヱーデン那威の如きも皆な女子に大學を開らくにあらずや云々。

片々

○高等女學校教諭　染谷德五郎氏は去る一日高等女學校教諭に任ぜられたり。

○婦人の脚氣　昨今氣候不順の爲めに府內各區に婦人の脚氣患者少なからざる由なるが其起因は重もに分娩後に併發するさ云ふ。

○林蝶子　神田一ツ橋外高等女學校雇教師林蝶子は去月二十八日同校助教諭を命ぜられたり。

○婦人矯風會副會頭　今日午后番町會堂に於て副會頭を撰擧し[illegible]ぜらるゝ筈會務の總理を托する筈の由。

○洋行女學生　フヒラデルフヒア女子醫學校を卒業したる醫學士岡見けい子は疾に歸朝したるが、師範校より派わされたる加藤錦子も大抵本月中に歸着せらるべし。

○地方に於ける一夫一婦の建白　婦人矯風會員と志を同ふするもの數多に同事件に付大坂婦人の建白あり今又京都にても清水さよ女といふが同じく之れに倣ひ本日其建白を京都府を經由して元老院へ差出す由なるが其趣意は刑法第三百十一條「本夫其妻の姦通を覺知し姦處に於て直に姦夫若くは姦婦を殺傷したる者は其罪を宥恕す云々」とあるを「本夫若くは本妻一方の姦通を覺知し姦處に於て直ちに姦夫又は姦婦を殺傷したるものは其罪を宥恕し云々」となし又同第三百五十三條「有夫の女姦通したるものは五ヶ月以上二年以下の重禁錮に處す云々」とあるを「有妻の男子若くは有夫の女他の男女に姦通したるものは共に六ヶ月以上二年以下の重禁錮に處す云々」と改正せんと云ふにありとか。

○寄附金　去月八日夜一ッ橋外東京高等女學校にて東京盲啞學校資金增加の爲めに催したる慈善音樂會にて收入したる金額は寄附金とも八百六十四圓の內より諸費六十二圓卅二錢を引去り殘金八百一圓六十八錢を昨日同會委員プリンス孃より盲啞學校に寄贈したり。

○莫大の毛綱　今度西京大谷派本願寺の本山大堂新築に要したる所の諸材木等は比類なき大材多きやに聞きしか中に就て殊に目を驚かしめしは大梁を引上げたる毛綱是れなり此毛綱と云へるは太サ六寸長サ七百五十四間目方三千零六十一貫六百五十目ありて全く毛髮より成れるものなり世に毛髮製の綱は左まで珍らしからざれども斯る大綱は古今無類なりと云ふ此の材料たる毛髮を寄附せしものは加賀能登越中三ヶ國の婦人（但し二十歲未滿）多くして總人員三十五萬三千八百八十三人なり之を一人に割り當れば平均一人より出せる目方は三十目の割合に當れりと。

○看病夫教科書　豫て海軍中央衛生會議にて島田海軍々醫大監木村同軍醫少監が取調中なりし海軍看病夫教科書は此程脫稿せしよしにて委員より高木同議長に提出し近々西郷海軍大臣へ差出すとのとなれば其發表も近きに在るべしといふ。

○米國人リレッチ孃　同孃は我國に渡航してより多年築地立教女學校々長に勤務たーりしも今度本國に於て結婚をなす爲め昨五日午前十時新橋發の汽車にて府下を發ーたるが多年氏の教育を受けし同校女生徒及東京在留の同國人等の見送り人にて停車場は一時頗る混雜を極め師弟の別情切なりしと見え同孃と女生徒は共に涙を拭ひ見る人をーて別離の情を感ぜしめしといふ。

○裁縫専門の學校　大日本婦人教育會々員の重立たる人々は今度婦人必須の技藝なる裁縫専門の一學校を設立せんと目下計畫中なる由。

○女官の所得税　麴町區役所の調査によれば宮城内女官の所得税の人員は柳原典侍外四十五人なりーといふ。

○淑女館　同館は本所横網町二丁目にあり館主は村松しほ子にて英漢數の諸學、裁縫、あみ物、和歌、茶の湯、立花等を教授し教師は英國の女教師一名と内國女子數名にて別科とーて產婆學をも教へ兩校通じて月謝は一圓のよし。

○既婚婦の氏　他へ嫁ーたる婦は生家の氏を稱すべき筈なれども其婦一旦夫家を相續ーたる後退隱したる時は夫家の氏を其儘稱用すべき義と此程東京府第一部長より各元郡區役所へ達せられしといふ。

○女學生専用寄宿舍　今井藤四郎と云へる人時弊を察して題號の如き寄宿舍を設けらるゝ由、異日其取締方一班の上昇見を述ぶべし。

○四十二番卒業式　府下四十二番女學校に於て英學科四名（秋山千代、藤澤ふみ、野邊増りつ、尾崎たつ、渡邊たか）日本學科五名（上記の中尾崎子を除き高木きん子を入る）の卒業に付去八日厚生館に於て卒業證書授與式ありー。

○鳥居坂女學校　去七日夜同校の音樂會あり來客二百五十名洵々洋々の面白き奏樂吟詠ありし。

○看病人學校設立の計畫　看病人たるものは病理の一斑位は心得べき筈なるに從來の看病人は兎角無學の婦女子のみを使用し未だ看病人を養成すべき完全の學校もあらざるを以て今度在横濱米國人グレート氏及び同夫人は一の看病學校を設立せん爲め廣く本國教會及び我國教會へも贊成を求むる由にて已に本國ヒラデルヒヤへは教師雇聘の照會をなしたりと。

○京都婦人唱歌會　同會にては去月廿八日より本月一日まで普通科生の卒業試驗を行ひたるが卒業證書を得たるもの十六名ありーと又同會生徒の現數は普通科百二十名、高等科二十五名なりと云ふ。

外報

○ユニフン、シグナル　萬國婦人禁酒會の機關ユニチン、シグナルの五月二日發兌に云く、本號は五萬八千五百部を發行するに至れり而して來々の十四名は來一月迄に一人に付十人の新客を増すべきとを約束せられたりとて其名を掲げたり。

○萬國政府へ禁酒法律施行請願書　右請願書を呈出する爲に米國の婦人禁酒會率先ーて萬國より賛成者を募りたるとなるが、此頃ろに至り右連署人名惣計十五萬人あり、内ち八萬三千人は米國以外にあり即はち英國アウストラリア日耳義パルマー、ニウゾランスウイツク、カナダ、セーロン、日本、印度、メキシコ、シヤム、土耳其等より申込みたるもの也。

○滅惡懸賞論文　米國慈仁會（ユーマン、ソサイエテー）に於て發りたる「罪惡を滅するの効能ある教育法」と云へる一百弗の懸賞論文は米國中の諸大學に通して答文を求めたるとなるが此頃に至りイリノイ州ノツクス大學のラルフ、トライン氏が答文賞を得たり。

○婦人の被選權　英國上院に於てミース伯の發議に係る婦人をーて郡會議員の被選權を得せーめんとの議案は否決せられたり。

○女學生衛生　此頃ろ英國のナチブル、ヒウグツセン孃はギルトン及びニウンハムの兩女子大學部より卒業ーたる女學生の衛生何如ん其の婚せーのちの健全何如んかを取調ぶる爲に綿密なる統計表を製したるが其の決果によれば教育なき只の女子よりも大ひに壯健なるとを見たり。

○女市長の下に返償了　米國カンサス州チスカルーサ市は前號にも言へる如く悉く女役員にて治めらるゝとなるが去年中に市債を悉とく償還し了れりとぞ、譜ー是れ南北戰爭以後初めての事なり。

○婦女子の賣買　支那にて飢饉の行はるゝ地方には今に妾女を賣ると一般に行はれ同地滯留の傳教師の記する所に依れば此賣買は牛馬の賣買と等しく中〻評判高し去りとて敢て市場に持出ーて賣るにあらず隱密に取引ありて二十歳より三十歳の婦人は五弗より十弗、十歳未滿は一弗若くは一弗半の相場なりと。

○園てる女史　同女史は長く當地に在りて勉强ー且つ婦人慈善會等のために盡力ー居られたりしが今度シカゴなるチヤコチツススクールに入學の目的にて昨九日當地を出發せられたり卒業歸朝の後は専ら我邦婦人社會に働かんとて熱心し居らるゝ由（ザ、スチーマー六月分）

The Two Great Companion Paintings:

MUNKACSY'S

"CHRIST BEFORE PILATE"

—: AND :—

"CHRIST ON CALVARY,"

REPRODUCED IN THE ORIGINAL COLORS.

Both Paintings are now in the possession of Mr. John Wanamaker of Philadelphia, U. S. A.

The purchase price of Christ on Calvary is given as **$125,000**

and that of Christ Before Pilate **$120,000.**

By the aid of some of the best artists and engravers in the country the PHELPS PUBLISHING Co. has succeeded in producing pictures which are pronounced by all who have seen them to be a faithful reproduction in every respect.

NOT PLAIN ENGRAVINGS, but EXACTLY LIKE THE ORIGINALS in all their beautiful colors. They are works of highart and fully worthy of the great originals of which they are exact copies. The skill and delicacy with which they have been executed is wonderful, and all the color values of artist's masterpieces have been admirably preserved, while the high intent and purpose of the exalted subjects have lost nothing in the transference. The pictures are of sufficient size to allow ample scope for the display of the salient features of face and form, while the varied expressions of hate, fear, curiosity, compassion and reverence animating the countenances of those assembled are shown with a startling fidelity that beggars description.

Munkacsy, while preserving a thoroughly reverential tone, treated Christ and those about him in a style of unflinching realism such as the world has not been accustomed to see in paintings of religious cast, and this realism has been maintained in the reproductions; as the originals are instinct with life and inspiration, so are the reproductions, not a jot or tittle of the original paintings having been toned down or abated.

Each picture is 21 x 28 inches in size, on the best heavy plate paper, and are suitable to adorn the walls of the wealthiest in the land. Hundreds of thousands of people have paid fifty cents each to view the original paintings, while we offer every one an opportunity to possess copies at a price that is merely nominal. Over 70,000 copies sold in U. S. A., besides several hundreds in all parts of the world. The price of these pictures is $1.00 each, [U. S. Gold] but in order to place them within the reach of as many as possible, we have decided to sell them at Yen 1.25 each, delivered. We will also make a farther reduction when one of each is taken; the two together for Yen 2.25.

Address all Orders to

THE METHODIST PUBLISHING AGENCY,

15, TSUKIJI, TOKYO.

世界無比 壹對油畫着荷廣告

耶蘇ピラトの法廳に立てる圖　原價十二萬五千弗

耶蘇カルバリー山に於て十字架に磔ける圖　原價十二萬弗

現今世界中油畫の著名なるもの多しと雖ども恐らく此の如く高價にして且つ美術の蘊奥を極めたるものは稀なるべし此畫當時米國新内閣驛遞總監ジョンワナメカ氏の所有にして既に歐米各所にて數百萬人の縱覽に供したるに各一人半弗を擲ち喜んで之を見たり以て此畫の善惡を推知するに足るべし然れども此畫惜むらくは唯一對に止まるを以て普く世界の人々の觀覽に供する能はず米國フエルプス會社大に之を遺憾とし此度新發明の油畫様の物に縮寫したり竪一尺七寸餘横二尺三寸餘にして其彩色人物の數其他景色人々の狂へる様耶蘇の柔順にして且つ榮光ある容貌等に至る迄恰も活動するが如く毫も原畫に異ふるとなし一昨年末より之を發賣し米國中にて既に七萬枚餘を賣却するに至れり其他全世界何處として此畫の至らざる所なし然に同會社にては日本の人々の未だ此畫を知らざるを憂ひて特別に左の價格を以て販賣の儀を弊社へ依賴し來れり四方の諸君よ至急御注文あらんとを希望す

壹枚　金壹圓貳拾五錢(配達賃共)

壹對　金貳圓貳拾五錢(仝)

東京築地明石町十二番館

日本朝鮮一手販賣處　雜書會社

横濱不老町　仝支店　長崎出嶋町　仝支社

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

交詢案內（乙）

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇はれたき方

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	敎師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても敎授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の敎授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
二〇	裁縫	年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之內ゟ小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受
二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は西もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に敎師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）產婆業を營まろゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に產婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督敎信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き每日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を敎へ家內の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり

本校定期試業終ルニ依テ本科豫科各級ヘ入學ヲ許ス志願ノ方ハ本月三十日迄ニ申込アレ學科ハ英文學和漢文學其他普通學及音樂等ニシテ外國敎師六名本邦敎師十名ニテ敎授ス○寄宿生ハ外國女敎師六名本邦女敎師七名生徒ト起臥ヲ共ニシ敎導保護ニ任スヘシ○規則書望ノ方ハ郵券二錢送付アレ

廿二年六月　東京築地四十二番

新榮女學校

遞信省認可

發兌

六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。六錢　郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會合會等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を揭ぐる毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町鍜々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年六月十三日印刷
明治二十二年六月十五日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.